

資料を読み解き，自らの考えを深める 子どもの育成をめざして Ⅱ

—Thinking Chartを活用した小学校第6学年社会科の実践を通して—

近年，国や本市の諸調査において，子どもたちの思考力・判断力・表現力に課題があることが指摘されている。社会科学習においてそれらの力を育成するためには，学習や生活の基盤となる知識・技能の確実な習得とともに，各種の資料から読み取ったことを的確に記録し，比較・関連づけ・総合しながら再構成する学習や，考えたことをまとめ，伝え合うことによりお互いの考えを深めていく学習の充実が求められている。

本研究では，小学校第6学年の社会科，特に歴史分野の学習において，子ども自らが資料を効果的に活用し，思考を深めるための指導の在り方を探った。具体的な手だてとして，事象相互の関連づけや思考の深化を促すThinking Chartを年表に組み込んだ「Thinking Chart年表」を考案し，学習活動に取り入れた。

歴史学習において，子ども自らが各時代の社会的事象の背景や，前後の時代相を認識した上で思考を深めるためには，どのようなことに留意する必要があるのか，実践授業を通して分析する。

目 次

はじめに	1	第3章 自らの考えを深める 子どもを育成するために	
第1章 歴史学習における 子どもたちの思考を深めるために		第1節 言語化の活動が歴史学習にもたらす 効果	
第1節 言語化の活動を取り入れた歴史学習		(1) 言語化の3つのステップが果たした 役割	28
(1) 昨年度の研究より	1	(2) Thinking Chartが果たした役割	29
(2) 諸調査より	2	第2節 一人一人の思考の深化を促すために	
(3) 子どもたちが歴史学習を深めるために	4	(1) 歴史学習においてより深い思考を行う ために必要なこと	30
第2節 研究の構造・枠組み		(2) 思考を深めるための関心・意欲	31
(1) 歴史学習における子どもの思考を深める ための言語の役割	5	(3) Thinking Chartの可能性	31
(2) 歴史学習における思考の深化	6	おわりに	31
(3) 歴史学習におけるThinking Chartの 果たす役割	7	資料	32
第2章 実践授業の様子			
第1節 「源頼朝と鎌倉幕府」での実践			
(1) 授業中の子どもたちの様子	10		
(2) 授業から見えてきたこと	13		
第2節 「徳川家光と江戸幕府」での実践			
(1) 授業中の子どもたちの様子	15		
(2) 授業から見えてきたこと	18		
第3節 「明治維新をつくりあげた人々」での 実践			
(1) 授業中の子どもたちの様子	20		
(2) 授業から見えてきたこと	23		
第4節 実践授業を終えて			
(1) 言語化の活動による子どもたちの変容	25		
(2) 指導者から見た言語化の活動	27		

<研究担当> 山下 博典 (京都市総合教育センター研究課研究員)

<研究協力校> 京都市立紫竹小学校

<研究協力員> 小森 千賀子 (京都市立紫竹小学校教諭)

近藤 友樹 (京都市立紫竹小学校教諭)

はじめに

社会科学習は、単に社会的な事実や事象を認識することにとどまらず、子どもが自ら追究すべき問題を見つけ、体験的な学習や調査活動を通して自らの問題を解決し、意思決定する力を育成することが望まれる。しかし、国や京都市の調査結果からは、問題解決のために用いる資料を読み取ることや社会的な事象相互の関連を把握することに課題があると指摘されている。

昨年度は、小学校第5学年の社会科学習に言語化の活動を取り入れた実践授業研究を行った。ここでは、資料に含まれる事実を「書き表す」ことが、子どもたちが資料の読み取りを正確に、詳細に行うことに有効な手だてとなった。また、読み取った事実相互の関連の把握や筋道立てた深い思考の促進を図るために開発した「Thinking Chart」は、子どもたちが学習したことの関連を把握しながら社会的な事象の背景にまで思考を深めることに有効な手だてとなった。

本年度は、小学校第6学年の歴史学習に3つのステップで行う言語化の活動を取り入れ、実践授業を通して研究を行った。歴史学習は資料の読み取りを通して間接的に「過去」を体験し、読み取った内容から歴史的事象について思考を深めることが必要である。歴史学習に言語化の活動を取り入れることは、個別の知識の習得で終わらず、個々の歴史的な事実・事象相互の関連を把握することにつながり、各時代の社会的な事象の背景にまで思考を深めたり、前後の時代相を認識した上で思考を深めたりすることに有効であると考えた。

また、単元を通して学んだことをThinking Chartを作成しながらまとめることは、子どもが自己の学びの程度を把握し、学習をよりよく進めるための手段としても有効であると考えた。とりわけ、Thinking Chartの手法を年表の形式に組み込んだ「Thinking Chart年表」は、資料から読み取った歴史的な事実・事象の関連づけを促すとともに、歴史的な事実・事象の因果関係や時代の流れの把握を促進すると考えた。

子どもたちが歴史学習において、資料を確実に読み取り、読み取った個別の歴史的な事象の「つながり」を意識しながら、当時の世の中について考えを深める子どもたちの姿をめざして研究を進めてきた。ここでは、言語化の活動とThinking Chartの活動を取り入れた実践授業の詳細とともに、その成果・課題について報告する。

第1章 歴史学習における子どもたちの思考を深めるために

本章では、筆者が行った昨年度の研究内容と、社会科に関する諸調査の結果をもとに、歴史学習における子どもたちの思考を深めるための方策について考える。そして、子どもたちが「資料を読み解き、自らの考えを深める」姿をめざした歴史学習の具体的なプログラムについて述べる。

第1節 言語化の活動を取り入れた歴史学習

昨年度の研究では、思考の発達段階における言語の果たす役割に着目し、短い言葉で書き表した「語」を操作する活動を言語化の活動として位置づけた。本節では、言語化の活動が歴史学習にどのような面で有効に働くのかについて述べる。

(1) 昨年度の研究より

昨年度の研究では、資料を読み解き、自らの考えを深める社会科学習を進めるために、言語化の活動として3つのステップを設定した。

図1-1は、資料を読み解き、考えを深める社会科学習の学習過程と言語化の3つのステップとの関係を示したものである。

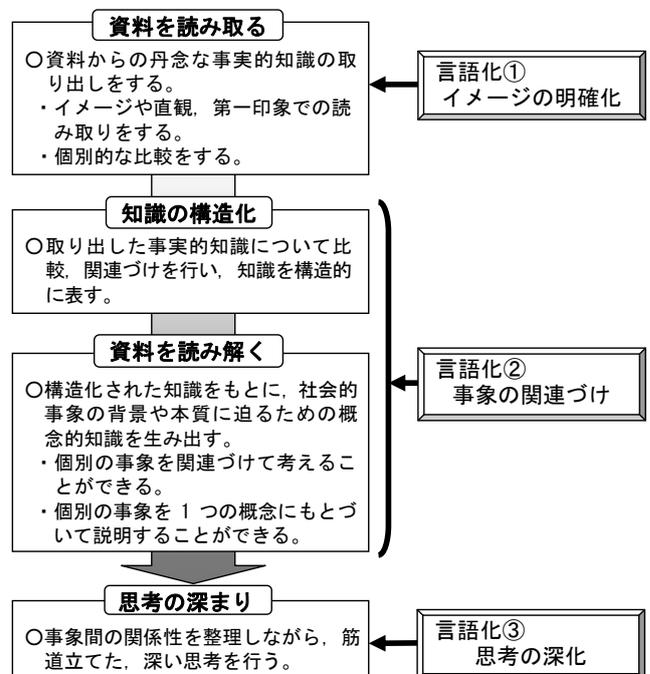


図1-1 資料を読み解き、考えを深める社会科学習の学習過程と言語化の3つのステップ(1)

社会科学習において思考を深めるためには、資料を丹念に読み取り、読み取った情報の比較・関

連づけを通して知識を構造化し、資料を読み解くことが必要である。この学習過程を子どもたち自らが推進できるように設定したのが、言語化の3つのステップである。各ステップでの具体的な活動は以下の通りである。

【言語化①－イメージの明確化】

資料に含まれるイメージ的な情報、今まで学習したことや経験したことなど、思考過程の中で形が無い情報を書き出し、可視化すること

【言語化②－事象の関連づけ】

書き表した言語情報の意味に着目し、思考過程の中で個々の事象を関連づけて、意味にまとまりのある集合体（概念的知識）をつくり出すこと

【言語化③－思考の深化】

複数の概念的知識をもとにして、学習内容を総合的に見ることによって、社会的事象の背景や本質に迫りながら、筋道立てた深い思考を行うこと

また、資料から読み取った個々の事象の関連を整理しながら構造的に表し、筋道立てた深い思考を推進できるようにするために、Thinking Chart（シンキングチャート、以下Tチャート）を開発した。図1-2は、Tチャートのモデル図である。

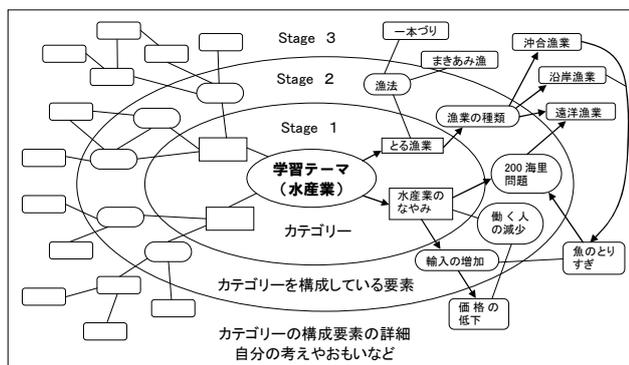


図1-2 Tチャートモデル図(2)

言語化の3つのステップとTチャートの活動を取り入れることにより、次のような子どもたちの姿が見られた。

【言語化①－イメージの明確化】では、様々な資料から詳細に、確実に情報を読み取る姿や、資料の確実な読み取りから疑問点が明らかになり、追究したいという実感のこもった学習問題の設定を行う姿が見られた。また、見学した内容や既習内容を関連づけて思考を深める姿も見られた。

【言語化②－事象の関連づけ】では、資料から読み取ったことを付箋紙に書き出して可視化し、Tチャートに配置するという操作をすることで、子どもたち自らが主体的に、容易に事象間の関連をつかむ姿が見られた。また交流場面では、グルー

プで1枚のTチャートを作成する活動を取り入れることにより、交流した情報をもとに関連づけをより確かにする姿が見られた。

【言語化③－思考の深化】では、Tチャートを活用することにより、事実に即して筋道立てた思考を行う姿が見られた。また、考えを交流することにより、他の人の調べた内容を踏まえて、思考を深める姿が見られた。そして、思考内容を可視化することにより、自分の思考の段階を把握し、さらに思考を深めようとする姿が見られた。

他にも、昨年度の研究を通して、次のような姿や場面が見られた。

- ・自分の考えをより確かにするために再度資料の内容を振り返る子どもたちの姿
- ・交流活動の際にTチャートを提示することで、学習内容を分かりやすく伝えようとする子どもたちの姿
- ・言語化の活動の経験を多く積むにしたがって、言語化の効果をより実感する子どもたちの姿
- ・子どもたちがTチャートを作成することにより、指導者がその場に合った適切な指導を行う場面 (3)

しかし、言語化の活動を取り入れた中で、子どもが資料を読み取る視点をつかむ学習の設定が必要であることや、資料から獲得した情報相互の関連をつかむための記録方法や学習活動の必要性などの課題が明らかになった。

(2) 諸調査より

まず、国立教育政策研究所教育課程研究センターが行った「平成15年度小・中学校教育課程実施状況調査 結果の概要及び教科別分析」(4)から、我が国の子どもたちの社会科の学力、特に歴史分野での学力実態を見る。

表1-1は、小学校第6学年の調査において、評価の観点別に見た問題ごとの設定通過率との比較である。

表1-1 評価の観点別に見た問題ごとの設定通過率との比較 (第6学年 社会)

区分	問題数	上回ると考えられるもの	同程度と考えられるもの	下回ると考えられるもの
社会的事象への関心・意欲・態度	16	8 (50.0%)	7 (43.8%)	1 (6.3%)
社会的な思考・判断	14	2 (14.3%)	7 (50.0%)	5 (35.7%)
観察・資料活用の技能・表現	16	8 (50.0%)	7 (43.8%)	1 (6.3%)
社会的事象についての知識・理解	51	26 (51.0%)	11 (21.6%)	14 (27.4%)

この結果について、「設定通過率を下回る問題の割合を見ると、『知識・理解』と『思考・判断』の観点他に比べて高かった」と分析している。

また、調査結果を踏まえた小学校第6学年の学習内容に関する指導上の改善点は、以下のように記されている。

- ①江戸時代以後の歴史学習を一層重視し、学習指導要領に示す人物を歴史的事象と関連付けて確実に指導し、理解を深める工夫
- ②年表や人物の業績に関する資料を一層効果的に活用した指導の改善・充実

①については、調査で明らかになった江戸時代以降の歴史的事象や人物の働き、室町時代や江戸時代の文化に関する内容の理解などについて不十分な例が見られたとしている。その原因として、「歴史的事象の意味を人物の働きや代表的な文化遺産と結び付けて考え、理解を深める指導と知識の定着が必ずしも十分ではなかった」と分析している。そして、指導上の改善点として「これまでどおり歴史的事象を厳選して取り上げ、それと関連の深い人物、文化遺産を重点的に扱うこととし、その際、学習指導要領に例示された人物については、歴史的事象と関連付けて確実に扱うように留意する必要がある」としている。

②については、調査の結果からは、明治以降の歴史の問題で、人物の業績を資料と関連づけたり、歴史的事象を年表と関連づけたりする「思考・判断」の問題において、設定通過率を下回る状況が見られたとしている。その原因として、「歴史学習において年表や歴史上の人物に関する資料が必ずしも効果的に活用されていなかった点がある」と分析している。そして、指導上の改善点として「歴史学習において、歴史的事象を年表に位置づけて前後の歴史的事象との関連を考えたり、それらと関係の深い人物の肖像画や人物年表、業績に関する文章資料などを効果的に活用し、歴史的事象と関連付けて人物の働きを考え、理解を深めたりする指導の改善・充実が必要」と指摘している。

次に、平成19年2月に京都市教育委員会が教育研究会と共催で実施した「平成18年度京都市学力定着調査」の調査結果について、調査結果をもとに出された「学力定着調査」報告(5)から、本市の子どもたちの社会科の学力実態を見る。

第6学年社会科の平均通過率は、75.1%であった。前回調査(平成18年1月・4月実施、74.6%)の平均通過率と比較すると、0.5ポイント上昇している。報告では、第6学年の調査結果について次

のように考察している。

- ①歴史的事実を正しく認識するための指導の充実
- ②社会事象の意味を考え、確かな判断をするための指導の充実

①については、通過率が低い設問の要因を、「事実のみが単独で知識として獲得され、複数の知識を比較・関連・総合して考えた結果生まれる『理解を伴った知識』に至っていないことにある」と指摘している。特に、通過率が低かった文化の特徴を問う設問については、「他の時代と比較したり、その時代の世相と関連させたりして学習を進めていくことが必要」としている。

②については、「資料の中の事実を丹念に拾い出し、事実と事実を考え合わせて学習を進めることが大切である」とした上で、まず資料の読み取りの段階について、「評価する側としては、根本的に資料が読めていないのか、資料が読めているにも関わらず思考ができていないのかということを見極めることが大切である」と指摘している。

また、各設問に述べられている考察・指導上の留意点は、以下のようなことが示されている。

- 各時代において資料を活用しながら学習することは、その当時の様子や特色をイメージしやすく、その時代を生きた人々のくらしに迫ることができ、時代の様子や文化の特色について理解しやすい。
- 写真1枚からその時代に生きた人を中心にして時代の様子や背景をつかむ指導や文章資料から読み取り、たくさんの疑問を学習の中で話し合うような指導が大切である。
- ただ羅列的に取り扱うのではなく、(中略)事実と結び付けて考えられるようにする。
- その時代の出来事と人の生き方を関連付けて学習していくことが望まれるのである。年表を活用する技能を身につけることも大切ではあるが、子ども達が学習問題を解決したいという願いをもって年表や資料を見つめていけるような学習のあり方を追い求めていきたい。

ここで、前述した2つの調査における中学校社会科の調査結果の分析を見る。小学校第6学年は中学校との接続期に当たる。また、社会科の学習内容についても、中学校第1学年から歴史分野の学習を行うこともあり、中学校社会科の調査結果を分析することが、小学校の歴史学習を見直す視点として重要であると考えた。

「平成15年度小・中学校教育課程実施状況調査結果の概要及び教科別分析」では調査結果を踏まえた指導上の改善点としては、「歴史的事象の考

察を通じて基本的な知識を定着させ歴史の大きな流れをとらえさせる学習指導の充実」(6)が必要であると指摘している。

また、「平成18年度京都市学力定着調査 報告」では、指導上の留意点として、「社会的事象の関係性をとらえるためには、まず基礎的基本的な知識の定着を図る指導の充実が必要である」(7)、「歴史的事象の関係性をとらえさせるために、年表の活用を今一度見直し、どの事象とどの事象がどのようにつながっているのかを常に確認する必要がある」(8)と指摘している。

(3) 子どもたちが歴史学習を深めるために

諸調査の結果・分析から、子どもたちが歴史学習を深めていくために、指導者が留意すべき点が明らかになった。これらの点を解決するために、昨年度の研究成果を生かすことができないだろうか。諸調査から明らかになった課題について、言語化の3つのステップに分けて考察する。

1. 言語化①—イメージの明確化

歴史学習は、学習対象が「過去」の人物や出来事であることから、歴史的な事象を直接体験することは難しい。そのため、歴史を学ぶ際には、現在に残されている様々な資料を通じて間接的に「過去」を体験する。つまり、歴史学習においては、資料を読み取ることが学習を進めていく上で、重要な役割を担っていると言える。

しかし、調査結果を見ると、資料の読み取りが不十分であったことが通過率の低さにつながったと思われるものが多く見られる。調査の分析・考察では、歴史的事象を正しく認識するための指導を充実させることが必要であると指摘している。

そこで、【言語化①—イメージの明確化】のステップを取り入れることにより、事実を丹念に拾い出すことを促進できると考える。また、資料を詳細に読み取ること、各時代の様子や特色をイメージしやすく、理解を促すと考える。そして、資料からの読み取り内容を書き出すことで、指導者は子どもたちの資料の読み取り状況を把握し、適切な指導をできると考える。

2. 言語化②—事象の関連づけ

前述のように、歴史学習においては資料の読み取りが欠かせない。様々な資料から読み取り、読み取った複数の事象を比較したり、関連づけたりすることにより、その時代を表す概念を見いだすことができる。概念を見いだすことにより、時代についての見方・考え方が深まり、理解や思考を

促すと考える。

しかし、調査結果を見ると複数の事象を関連づけて共通性を見いだすなど、歴史的事象について考察することに課題があると指摘されている。特に、人物と業績とのつながり、文化と時代背景などのつながりを把握することに課題が多く見られた。人物に関しては、資料を効果的に活用して、歴史的事象と関連づけて人物の働きを考えることや、時代の出来事と人の生き方を関連づけて学習することが求められる。また、文化については、他の時代と比較したり、その時代の世相と関連させたりして学習を進めることが求められる。

そこで【言語化②—事象の関連づけ】のステップで資料からの情報を付箋紙に書き、各情報の意味に着目しながらTチャート上で関連づけることにより、複数の事象の関係性をとらえることができ、理解を深めることにつながると考える。また、Tチャートを活用することで複数の事象の関係性を一目で把握することができることから、人物と業績、文化と時代背景など歴史的事象相互の関係性を把握することにも有効であると考える。

3. 言語化③—思考の深化

小学校社会科における歴史学習は、人物や出来事を中心に取り上げて進められる。取り上げた人物や出来事を追究する中で、時代背景をつかむことができ、その時代を見る目を養うことができる。また、各事象が起こった時間の前後関係をつかむことで、より深く時代相を理解することができる。つまり、小学校の歴史学習においても歴史の流れを意識して学習を進めることが大切であり、中学校の歴史学習にもつながることであると考える。

しかし、調査結果を見ると、歴史の流れをとらえたり各時代の特色をとらえたりすることに課題が見られる。調査の分析では、他の時代と比較することにより各時代の特徴を考えるなど、社会事象の意味を考え確かな判断をするための指導の充実が必要であると指摘している。さらに、自分の考えをまとめ、記述したり、話し合ったりする指導の充実が求められている。

そこで、【言語化③—思考の深化】のステップでTチャートを活用することにより、事実に基づいた思考を行ったり、筋道立てた深い思考を行ったりすることができる。また、Tチャートを活用することは、各時代の特色をとらえることや歴史の流れをとらえることを促進したり、自分の考えをまとめて記述したりする際にも有効であると考える。

第2節 研究の構造・枠組み

第1節では、諸調査の結果・分析から明らかになった歴史学習の課題を解決するために、昨年度の研究で着目した言語化の3つのステップを学習活動に取り入れることが有効であることについて述べた。本節では、歴史学習における子どもたちの思考を深めるために、歴史学習を行う小学校第6学年の子どもの発達段階を踏まえながら、作成した具体的なプログラムについて述べる。

(1) 歴史学習における子どもの思考を深めるための言語の役割

小学校第6学年の子どもの思考について、奥野は、「この時期の児童の思考は、具体的思考の段階を過ぎ、形式的操作をもとにした抽象的思考の段階に差し掛かっている」(9)と述べている。この段階の思考の主な特徴は、以下のようにまとめることができる。

- 思考が具体的内容から自由になるため、仮説を立て、それを基にして演繹的に考える〈仮説―演繹的思考〉ができるようになる。
- 概念の操作が比較的自由にできるようになるため、具体的操作でする操作を命題の形で表現する二次的思考、いわば〈操作を操作する〉ことが可能になる。
- 形式的な操作の面では成人の思考と本質的に違わないが、概念の操作が成人のようにスムーズに行かないため、複雑なものを上手に処理することが困難であり、また知識の量が乏しいため物事を相対的、多面的に判断することが十分できない。(10)

そして、この時期の子どもに対して奥野は、「豊富な教材を基にして知識量の増大をはかることとともに、概念化のしかた、定義のしかたなどを教えることにより、概念の操作をより自由なものにさせるよう努力することが必要である」(11)と指導者の支援方法について指摘している。

では、このような小学校第6学年児童の発達段階に見られる特徴を踏まえて、どのような歴史学習を進めていけばいいだろうか。

歴史学習を深めるためには、歴史という過去を学ぶ特性から、そして思考を深めるための知識量を増やすことから、様々な資料を活用する必要がある。そのためには、資料の読み取りを詳細に、確実にを行うことが求められる。資料の読み取りは、前述したように、指導者が子どもたちの読み取りの程度を確実に把握し、適切な指導を行う必要がある。また、概念化や定義の方法を教えて概念の

操作をより自由なものにするためには、概念を操作するための材料となる知識が必要になる。

そこで歴史学習における子どもたちの思考を深めるためには、言語の果たす役割に着目することが重要であると考え、昨年度の研究で着目した言語化の3つのステップを取り入れた歴史学習を考えた。歴史学習では、様々な資料を通して過去の事実・事象をつかむことから、資料の読み取りを確実にし、読み取った内容から思考を深めることが必要である。第1節でも述べたように、言語化の活動を取り入れることにより、資料の詳細な読み取りや、事象間の関連の見だし、筋道立てた深い思考を促進することができる。また、子どもたちが読み取った内容や思考した内容を書き表すことによって、指導者は子どもたちの読み取りの程度や思考内容を把握することができ、適切な支援を行うことができる。

安野は、社会科における言葉の役割を述べている。以下は、その要約である。

【社会科における言葉の役割】(12)

- ①社会に生きる人々の行為や相互のかかわりの様子、出来事などを事実としてとらえる際のツールとしての役割
- ②事実としてとらえた人々の行為や相互のかかわりの様子、出来事などの社会的な意味を考え、それを明らかにしていく思考の活動(吟味)を促進するツールとしての役割
- ③他者とのコミュニケーションによって生まれる協働的な学びを支えるツールとしての役割

このことは、図1-1(p.1)で示した言語化の3つのステップと共通する部分を含んでいる。上記の①は人々の行為や出来事などの事実を言語情報としてとらえる【言語化①―イメージの明確化】と共通する部分である。また、上記②は個々の事実を関連づけて概念的な知識を生み出し、思考の深化を促進する【言語化②―事象の関連づけ】と【言語化③―思考の深化】にあてはまると考える。そして上記③については、【言語化①―イメージの明確化】の資料から見つけたことを書き表すことによって可能となる資料から読み取った情報の交流や、【言語化③―思考の深化】におけるTチャートを活用した考えの交流などにあてはまるのではないかと考える。

子どもたちの思考を深めるためには、思考における言語の果たす役割に着目して、言語化の活動を工夫して取り入れた歴史学習を具体的に構築していくことが求められている。

(2) 歴史学習における思考の深化

子どもたちは歴史学習の様々な場面で「思考」している。「思考」の一例としては、資料から分かる情報をもとに行う直感的な思考や、情報を比較するときに行う比較思考、情報相互を関連づけるときに行う関連思考などが挙げられる。しかし、直感で考えたり、比較や関連づけを通して考えたりする上で留意しておきたいことがある。

小学校学習指導要領では、社会科の目標(13)を次のように規定している。

社会生活についての理解を図り、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育て、国際社会に生きる民主的、平和的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。

社会科学習は、公民的資質の基礎の育成をねらいとしている。公民的資質とは、「民主的・平和的な国家・社会の形成者としての自覚をもち、自他の人格を互いに尊重しあうこと、社会的義務や責任を果たそうとすること、社会生活の様々な場面で多面的に考えたり公正に判断したりすることなどの態度や能力」としている。歴史学習においては、歴史学習の様々な場面で多面的に考えたり、公正に判断したりすることにより、公民的資質の基礎を育成することが求められる。

では、歴史学習において、子どもたちに求められている具体的な思考の姿は、どのようなものであろうか。小学校学習指導要領社会科の第6学年の内容(1)(14)には、次のような記述が見られる。

我が国の歴史上の主な事象について、人物の働きや代表的な文化遺産を中心に遺跡や文化財、資料などを活用して調べ、歴史を学ぶ意味を考えるようにするとともに、自分たちの生活の歴史的背景、我が国の歴史や先人の働きについて理解と関心を深めるようにする。

この中で「歴史を学ぶ意味を考えるようにする」とは、「単に過去の出来事を理解するだけでなく、現在の自分たちの生活や国家・社会の発展の基盤がどこにあるのかを考えたり過去の出来事を現在及び将来の発展に生かすことを考えたりすることができるようにすることである」としている。

さらに、小学校学習指導要領社会科の各学年にわたる内容の取扱いと指導上の留意点(1)(15)には、以下のような記述が見られる。

各学年の指導については、児童の発達段階を考慮し社会的事象を公正に判断できるようにするとともに、個々の児童に社会的なものの見方や考え方が養われるようにすること。

この中で、特に社会的なものの見方や考え方が

養われるために「社会的事象を比較・関連・総合して見たり考えたり、社会的事象を空間的、時間的に理解したり、公正に判断したり多面的にとらえたりできるようにすることが大切である」としている。

つまり、歴史学習における「思考」とは、子どもたちが歴史上の事実・事象を比較・関連・総合して見たり考えたりしながら空間的・時間的な理解をすることにより、自分自身の生活や国家・社会の発展の基盤を考えたり、現在や将来の生活に生かそうと考えたりする姿であると考えられる。

宮原は、歴史学習において抽象的な思考力、現象から本質を見抜く力を育てるために、次の3点が必要であると述べている。

- ① 事実を見ること 【事実認識】
- ② 事実と事実との関係を説明できること 【関係認識】
- ③ いくつかの関係認識を総合して、学習対象の意味(価値)を認識すること 【意味(価値)認識】 (16)

この3点は、言語化の3つのステップと共通する部分が多い。【言語化①ーイメージの明確化】による事実認識、【言語化②ー事象の関連づけ】による関係認識を経ることにより、初めて学習した歴史的事象を自分たちのかかわりで考える意味(価値)認識へと深めていく(【言語化③ー思考の深化】)ことができるのである。

図1-3は、歴史学習における思考の深化の過程と言語化の3つのステップとの関係を表したものである。

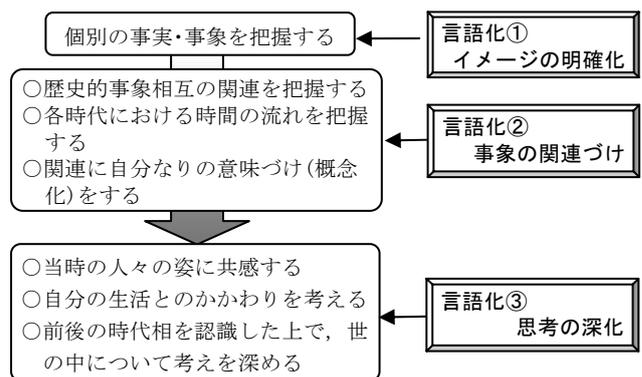


図1-3 歴史学習における思考の深化の過程と言語化の3つのステップ

資料などから事実・事象を把握し、それらの事実・事象相互の関連を空間的・時間的に把握することにより、当時の人々の姿や思いに共感したり、自分の生活とのかかわりを考えたりすることができるのではないだろうか。そして、歴史的なもの見方や考え方を養うこと、社会科でつきたい力を身につけさせることができると考える。

(3) 歴史学習におけるThinking Chartの果たす役割

では、歴史学習において子どもたちの思考を深めるために、どのような方法が求められているのだろうか。社会科において、子どもたちの思考を深めるために様々な研究がなされているが、ここでは図式化を使った実践について見る。

關は、「社会的事実・事象の構造理解と論理的な思考という二つの行為が同時進行的に可能な方法」(17)として、ウェbbingの手法を社会科学習に取り入れた実践を行っている。言語化との関連については、「いくら自由記述でも、言語化の方法で文章に表すのは、なかなか苦手な子どもも多い。図式化の方法にしても、視覚的に言語を補助するためのものとして、位置づけている場合が多い。ウェbbing法は、この言語化と図式化を統合した方法でもある」(18)とウェbbingを活用する効果を述べている。

京都市立百々小学校では、矢印を活用した思考法(矢印学習)が実践されている。この矢印学習とは、「学習問題に対して意味をもった数種類の矢印を活用しながら、必要な社会的事象をもとに自分の考えを書きまとめながら思考を広げ・深める学習法」(19)としている。この学習法を取り入れることにより、「事実と関連付けて当時の人の立場になって考えたことや様々な歴史的事実から学習問題に対して考えることができるようになっていく」(20)、「事実を順序だてて整理した上で考えを導き出したり、事実を根拠にして自分で考えたりしたことから学習問題に対する考えを導き出したりすることができるようになっていく」(21)などの子どもたちの姿を報告している。

これらの実践からも、学習活動に図式化の活動を取り入れることは、学習内容の理解の深まりや思考の深まりに効果があることが分かる。

筆者も昨年度の研究では、第1節でも述べたように、資料から読み取った個々の事象の関連を整理しながら構造的に表し、筋道立てた思考を促すために、Tチャートを開発した。言語化の活動を通して獲得した概念や考え方を図式化し、視覚的に表現することで、事象間の関連を一目で把握するとともに、事実在即して思考を進めることができた。歴史学習においても、個々の事象の関連をつかみながら思考を深めることが大切である。

しかし、Tチャートの手法を歴史学習に取り入れるためには、工夫が必要だと考える。昨年度の研究で扱った第5学年の地理的分野の学習では、

Tチャートを活用することが「現代」という同じ時間における空間的な広がりをとらえることに適していた。

一方、歴史学習では、空間軸とともに時間軸(歴史の流れ)も考慮に入れなければならない。つまり一つの歴史的事象がなぜ起こったのかという原因となる事象や、起こった結果どのようになったのかという事後の事象との関係が把握できないと、実感のある理解には結びつかない可能性があり、単なる事象の「暗記」に陥ることが危惧される。

では、時間軸を意識し、歴史の流れを把握するためにはどのような方法がよいだろうか。

歴史学習では時代の流れをつかむために、年表を使った学習をすることが多い。歴史的事象を年表に配置することにより、歴史の流れを概観することができる。

照井は、「歴史学習ではその時代の特徴的な事象を部分的、断片的に学習するに留まる場合が多くないだろうか。『点』としてとらえた歴史的事象を、連続的、関連的な『線』としてとらえることが大切である」(22)として、歴史を「線」でとらえるために年表を活用する効果を述べている。年表の活用方法について、「単元の学習のまとめでは、その時代の特徴的な人物や政治のしくみ、暮らしや文化などについて振り返る。その際に、各時代との関連付けや比較を通して、歴史を連続的にとらえさせたい」(23)と述べている。

また、川原は、小学校における年表の活用について、「通史を扱わない小学校では、年表の事象一つ一つの関係を詳しくは扱わない。しかし、時代を概観し、どの人物のどの事象が、新しい時代を起こしたのか考えることは極めて大切である。時代の変化を、複数の事象の絡み合った結果とし、時代が変わる理由や意味を子どもなりに大まかに理解することは、未来に生きる子どもたちにとって歴史を学ぶ意味でもある」(24)と述べている。

図1-4は、本市が採択している東京書籍の教科書に掲載されている年表の一部である。

年	時代	社会のできごと	文化のできごと	教科書に出て
1600	徳川幕府の時代	織田信長が室町幕府をほろぼす(1573) 豊臣秀吉が全国を統一する(1590) 徳川家康が江戸に幕府を開く(1603) 参勤交代の制度が定められる(1635) 島原・天草一揆(1637) 鎮国が完成する(1639)	● 鉄砲が伝わる(1543) ● キリスト教が伝わる(1549)	● 明智光秀 ● 豊臣秀吉 ● 徳川秀忠 ● 徳川家康(天守四郎)
1700	武士の世の中	● きんぎょが続き、一揆や打ちこわしが多くなる ペリールが浦賀に来る(1853) 各国と通商条約を結ぶ(1858) 薩摩藩と長州藩が連合する(1866) 明治維新、江戸を東京とする(1868)	● 町人の力 のび、 町人の文 化が栄え る	● 近松門左衛門 ● 本屋宣長 ● 伊能忠敬 ● 大塩平八郎 ● ペリール ● 岩倉具視
1870		廃藩置縣が行われる(1871) 徴兵令が出る(1873)、地租改正(1873) 西南戦争(1877)	● 学制がしかれる(1872) 「学問のすゝめ」(1872) ● 東京、横浜間に鉄道が	

図1-4 教科書に掲載されている年表の一部(25)

これを見ると、子どもたちが学ぶ歴史的事象が出来事の起こった順に分かりやすくまとめられている。また、「社会の出来事」と「文化の出来事」が分けて記載されており、学んだことの整理が行いやすくなっている。他の教科書・資料集などに掲載されている年表も、出来事の起こった順に歴史的事象が並べてあるような形式である。このような年表を活用することは、学習した内容を振り返ったり、歴史の大きな流れをつかんだりすることには非常に有効である。

これまでの歴史学習の実践において、年表を効果的に活用するために、様々な試みがなされてきた。しかし、経験則ではあるが、子どもたちの年表の活用状況を見ると、「〇年に〇〇が起こった」という歴史的事象の時間的な位置を調べるための資料として、あるいは、学習のまとめとして時間の流れに沿って学習内容を配置し、「覚える」ための方法として年表が活用されることが多かったと感じる。

特に、年表の形式で多く見られるように大きな歴史的事象が並べてある状態では、歴史的事象相互の関連や、各歴史的事象の詳細部分や背景などをつかめず、学習内容を理解できていない子どもにとっては、年表の記述を「覚える」ことのみで陥ってしまうと思われる。また、歴史に対する理解や思考を深めることも難しいと言える。

諸調査結果の分析・考察でも、前後の歴史的事象との関連をとらえさせるために、年表の活用を見直す必要性を指摘している。

以上のことから、子どもたちが事象間のつながりをとらえながら思考を深めるために、年表を活用できるような指導の在り方が求められているといえる。そこで、本研究では、昨年度の研究内容であるTチャートの特長を年表に取り入れた「Tチャート年表」を開発した。

図1-5はTチャート年表のモデル図である。

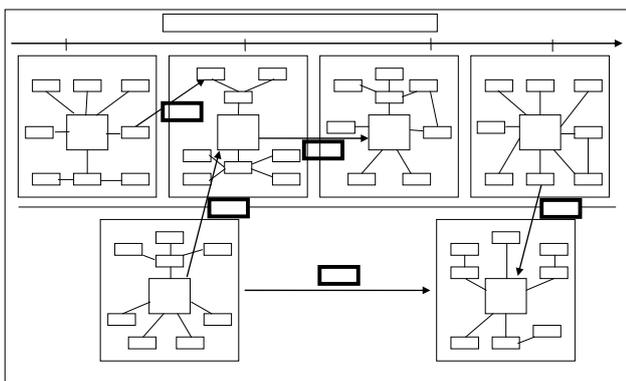


図1-5 Tチャート年表 モデル図

昨年度の研究で開発したTチャートの特長は、資料からつかんだ情報のつながりを、それぞれの意味に着目しながら線で結ぶことにより、事象間の関連を一目で把握できる点である。Tチャート年表でもこの特長を

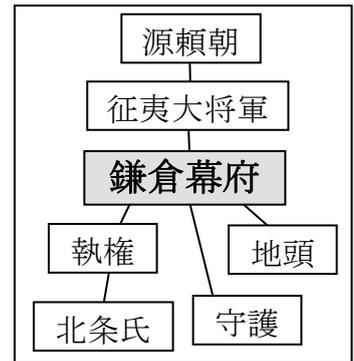


図1-6 Tチャート(例)

生かして、まず図1-6のような「Tチャート」を作成する。このTチャートは、中心にカテゴリーとなるもの(例：鎌倉幕府)をStage 1として配置する。その周辺にはカテゴリーを構成する要素をStage 2として配置する。このStage 2は、資料から分かった情報や学習を通して学んだことなどがあてはまる。

そして、各事象の意味に着目して、Stage 2の中でも関連のある事象同士を線で結ぶことにより、1つのTチャートが完成する。このTチャートを作成することにより、各歴史的事象について構成する具体的な内容を踏まえながら構造的に理解をしたり、思考を深める際に事実にもとづきながら、筋道立てた思考をしたりすることができる。考える。

本研究で開発した「Tチャート年表」は、図1-6のようなTチャートを各単元の歴史的事象ごとに作成した上で、1單元分のTチャートを年表上に配置したものである。各歴史的事象の起こった時間の前後や因果関係を意識しながらTチャートを年表の形式で配置する。そして、Tチャート間でのつながりを線で表すことにより、Tチャートだけでは表すことのできなかった時間軸における関連を表すことができると考える。さらに、Stage 3としてそれらのTチャート間の関係を表すキーワードを配置することにより、認識をより深めることができると考える。

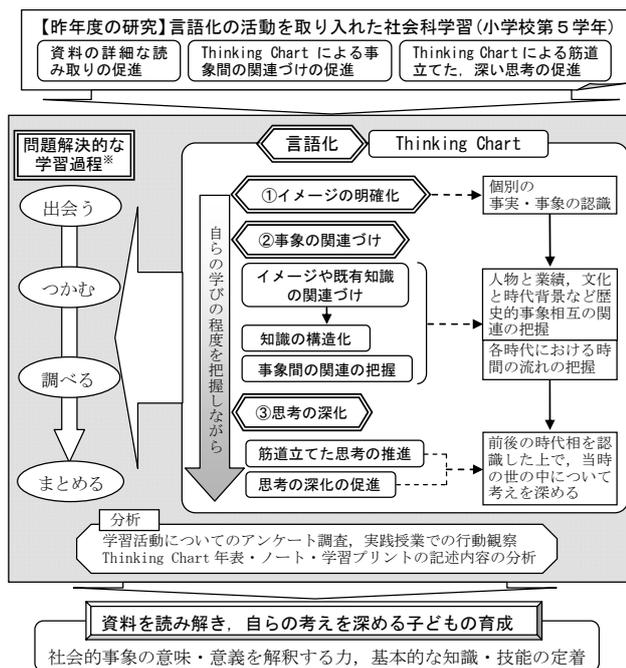
このように、【言語化①－イメージの明確化】の活動で資料からつかんだ個別の事実・事象が、【言語化②－事象の関連づけ】の活動であるTチャートの作成を通して、人物と業績、文化と時代背景など、歴史的事象相互の関係を表すことができると考える。そして、事象の起こった前後関係を年表として表すTチャート年表を作成することにより、歴史の大きな流れを把握することができ、歴史的事象の起こった前後関係や因果関係な

どを踏まえながら、筋道立てた思考をすることができると考える。

また、Tチャートを作成し出来事の起こった順に沿って配置したり、社会の動きと人々の生活・文化に関する動きの2段に分けて年表上に配置したりすることにより、社会（政治）の動きが人々の生活と密接に関係していることを実感しながら認識できる。そして、当時の人々の思いや考えをつかむことができるようになることから、子どもたちは当時の人々の姿に共感するとともに、自分自身の生活の在り方に生かすような考えが生まれてくると考える。

今までの年表は歴史的事象の羅列に留まることが多く、思考を深めるには難しい点があった。しかし、このTチャート年表は、歴史的事象の関連を表しながら、同時に時間の流れを表すことになる。このTチャート年表を取り入れることにより、子どもたちの歴史学習における思考はより深化すると考える。

図1-7は本研究の構造図である。



※ここで示した問題解決的な学習過程は、京都市小学校指導計画で示された学習過程である。
「出会う」…単元への興味・関心を高める過程
(単元の学習に対する動機づけをする過程)
「つかむ」…追究すべき学習問題をつかむ過程
「調べる」…問題解決のために追究する過程
「まとめる」…学習したことをまとめる過程

図1-7 研究構造図

言語化の3つのステップやTチャート年表の特長を生かしながら、資料を読み解き、自ら考えを

深める歴史学習のプログラム開発を行った。

次章では、プログラムに基づいた実践授業の様子を詳細に報告する。

- (1) 拙稿「No. 508 資料を読み解き、自らの考えを深める子どもの育成をめざして」『平成18年度研究紀要』京都市総合教育センター 2007.3 pp. 13~14
- (2) 前掲(1) p. 11
- (3) 前掲(1) pp. 33~34 「(2) 学習プログラムをよりよく進めるために」を要約したもの
- (4) 国立教育政策研究所教育課程研究センター『平成15年度小・中学校教育課程実施状況調査 結果の概要及び教科別分析』2005.9 pp. 105~107
- (5) 京都市教育委員会『「学力定着調査」報告 - 小学校社会 - 』2007.7 pp. 79~86
- (6) 前掲(4) p. 195
- (7) 京都市教育委員会『「学力定着調査」報告 - 中学校社会 - 』2007.5 p. 4
- (8) 前掲(7)
- (9) 奥野茂夫「思考力の形成」『児童心理学講座4認識と思考』金子書房 p. 285
- (10) 前掲(9)
- (11) 前掲(9)
- (12) 安野功「社会科における言葉の重視と体験の充実」『初等教育資料 No. 823』東洋館出版社 2007.7 pp. 16~17
- (13) 文部省『小学校学習指導要領解説(社会編)』1999.5 p. 11~13
- (14) 前掲(13) pp. 86~87
- (15) 前掲(13) pp. 132~133
- (16) 宮原武夫『子どもは歴史をどう学ぶか』青木書店 1998.3 pp. 71~72
- (17) 關浩和『ウェビング法 - 子どもと創出する教材研究法 - 』明治図書 2002.7 p. 126
- (18) 前掲(17)
- (19) 京都市立百々小学校「人の生きる姿を自分に生かす社会科学習」『学ぶこと大好き - 「わかった」瞬間に出会える授業への改善(平成18年度京都市立百々小学校研究紀要)』2007.1 p. 72
- (20) 前掲(19) p. 73
- (21) 前掲(19) p. 73
- (22) 照井孝司「事象の相互関係を問う」『社会科教育 No. 570』明治図書 2006.12 p. 30
- (23) 前掲(22) p. 31
- (24) 川原雅樹「日本の自画像をどう授業するか “年表”の数字で語る日本の歩み」『社会科教育 No. 559』明治図書 2006.1 p. 94
- (25) 東京書籍『新編 新しい社会6上』2004.3 pp. 49~50の間に折込みで掲載されている年表の一部を使用した

第2章 実践授業の様子

実践授業前に、子どもたちの社会科学学習に対する意識についてアンケート調査を行った。その中で、「楽しい」「役に立つ」などの肯定的な意見も見られたが、「難しい」「覚えられない」「学習したことがごちゃごちゃになる」「面倒だ」「苦手だ」といった否定的な意見も見られた。この調査結果から、社会科学学習にある程度好感をもちつつも、子どもたちが社会的事象相互のつながりを見いだせず、苦勞している様子が分かった。

このアンケート調査の結果と前章で述べた学習プログラムを踏まえ、京都市教育委員会が発行している小学校社会科の指導計画を参考にしながら、言語化の活動とThinking Chart年表の活動を取り入れた指導計画を作成し、実践授業を行った。実践を行った単元は「源頼朝と鎌倉幕府」「徳川家光と江戸幕府」「明治維新をつくりあげた人々」の3単元である。

本章では、「出会う」「つかむ」「調べる」「まとめる」という、4つの場面を通して、実践授業の様子と子どもたちの変容について報告する。

なお、実践授業で使用した資料は、本市で採択している教科書「新編新しい社会6上（東京書籍）」に掲載されているものである。

第1節 「源頼朝と鎌倉幕府」での実践

本単元の目標は以下の通りである。

- 源平の戦いや武士の生活の様子、元との戦い、室町文化に関心をもち、このころ武士による政治が始まったことや、京都の室町に幕府が置かれたところに室町文化が生まれたことが理解できるようにするとともに、今日の生活文化に直結する要素をもつ室町文化に親しもうとする心情をもつようにする。
- 年表や文章資料、イラスト、写真などの資料を効果的に活用して、源平の戦いや武士の生活の様子、元との戦い、室町文化について具体的に調べ、ノートやレポートにまとめる力を育てるとともに、源頼朝などの人物の業績や室町文化が我が国の国家・社会の発展に果たした役割を考えるようにする。(26)

この目標を達成するため、言語化の活動を取り入れた指導計画(p.32-【資料①】)を作成し、実践を行った。

(1) 授業中の子どもたちの様子

《「出会う」「つかむ」場面での様子》

「出会う」「つかむ」場面では、資料「武士のやかた(復元図)」を提示し、図2-1のように資料か

ら気づいたことをプリントに書き出す【言語化①-イメージの明確化】の活動を取り入れた。その際、前単元で学習した平安時代の

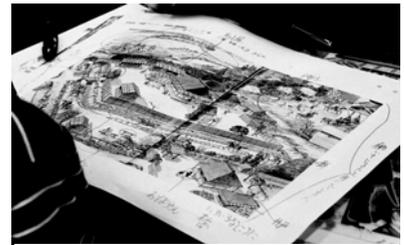


図2-1 「武士のやかた(復元図)」から情報を書き出す

資料「都の貴族のやしきの様子(復元図)」を合わせて提示し、2つの資料を比較することにより、平安時代からの世の中の変化をつかむことができるようにした。この活動を通して、子どもたちは資料「武士のやかた」にある外敵から身を守るための様々なしくみ(やしきを取り囲む堀や塀、遠くまで見渡すことができる物見やぐらなど)や、武士の生活の様子(弓や馬乗りの練習、やしきの周辺で農作業をしている様子など)に気づき、プリントに書き出す姿が見られた。書き出した内容について小グループで交流することにより、気づかなかった情報についても知ることができ、多面的な資料の見方につながったと考えられる。

また、資料「都の貴族のやしきの様子」と比較したことにより、建物のつくりの変化や武士が登場した背景への興味・関心が生まれ、時代の変化に対する疑問点を明確にすることができた。

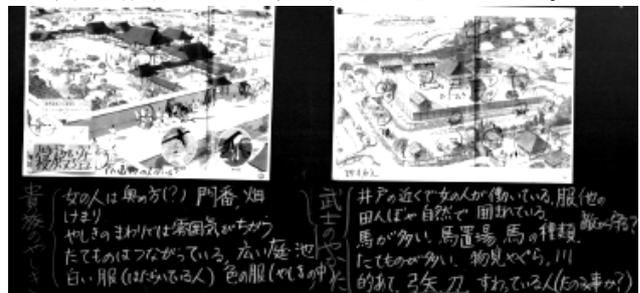


図2-2 「都の貴族のやしきの様子(復元図)」と「武士のやかた(復元図)」との比較

その後、資料「貴族を守る武士」を提示しながら、武士が登場した背景について、教科書や資料集を活用しながら調べる活動を行った。

子どもたちは、調べ学習の中で、①武士が大きな力をもつようになり、その中でも平氏と源氏の勢いが強かったこと、②平氏が源氏をおさえ、朝廷の重い役につき政治を行っていたが、平氏一族を中心とする政治に貴族や武士たちの間に不満がつのっていたことを知り、武士の政治についての追究意欲が高まっていく姿が見られた。

そこで学級全体の学習問題を、

武士が政治を行ったころの世の中について考えよう

と設定し、追究活動を行った。

《「調べる」場面での様子》

「調べる」場面では、子どもたちが調べた内容を生かしながら学習を進めることにした。1時間の学習の最後に子どもたちの声を集約して次の時間の学習問題を提示して、さらなる



図2-3 補助資料の提示

追究活動を行うようにした。そして、調べてきた内容を小グループ、学級全体で交流し、図2-3のように補助資料を提示しながら学習問題を解決するようにした。

例えば、第3時では「武士が政治を行った鎌倉幕府は、どんな政治をしたのだろうか」という学習問題で、事前の家庭学習をもとに交流活動を行った。鎌倉幕府の立地、しくみ、鎌倉幕府での幕府と武士との関係を表す「ご恩と奉公」など、子どもたちが調べた内容を板書に集約した。鎌倉幕府の立地については、指導者は資料「鎌倉（復元模型）」を提示し、調べた内容を確認した。

ご恩と奉公については、資料「頼朝のご恩と政子の訴え」を提示し、図2-4のように資料からキーワードを抜き出しながら図示することにより、ご恩と奉公の関係を明確につかめるようにした。

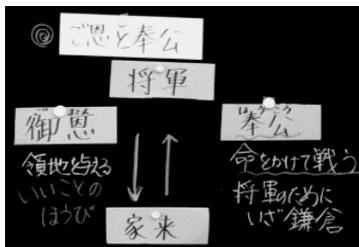


図2-4 キーワードを使って図示した板書

この学習方法で第2時～第4時までを行った。多くの子どもは、教科書や資料集を活用して調べることができていた。しかし、調べた内容の量や分野に個人差が見られ、交流活動を活発にすることができなかった。調べた量の多い子どもが交流活動で中心となって話し、他の子どもがなかなか発表することができなかったグループも見られた。

そこで、第5時から、子どもたち各自で調べた内容を授業の中心にするのではなく、中心となる資料を数点精選し、「出会う」「つかむ」場面と同じように、資料から分かる情報を書き出す【言語化①ーイメージの明確化】の活動を取り入れた。

第5時の室町の文化についての学習では、資料「金閣と足利義満」「銀閣と足利義政」の読み取りから学習を始めた。金閣や銀閣は室町文化を代表する建造物である。それぞれの写真から特徴のあ

る部分を書き出すことにより、それぞれの文化のもつ特徴の違いを明確につかむことができた。

第6時は銀閣の庭づくりを教材にして庭園づくりにかかわった人々の姿を探る学習を行った。庭づくりをしている様子の資料(27)を配布し、資料から気づいたことを書き出す



図2-5 資料から気づいたことを書き出す

ことにより、庭づくりの大変な作業の様子をつかんだ。また、庭師である又四郎の日記を読み、差別をされながらも自分の仕事に誇りをもって生きていた姿に共感することができた。このように、全員が同じ資料から分かることを書き出すことで、同じ資料をもとに話し合いを進めることができ、個での追究から集団での追究へとスムーズに学習を進めることにつながった。

また、指導者は子どもたちの書き出した内容を見ることで、資料を見る視点を助言することができ、適切な指導を行うことができた。

「調べる」場面で大切にしてきたことは、1時間の中でキーワードを数個選び出し、そのキーワードを使って1時間の学習のまとめをノート2～3行

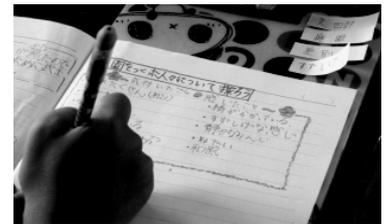


図2-6 キーワードをもとに1時間のまとめをする

に文章で表す【言語化②ー事象の関連づけ】の活動である。この活動を行うことにより、1時間の振り返りを行うとともに、事象の関連づけを意識できるようにした。また、キーワードについては付箋紙に書き出し、それらの付箋紙をためておくことで、「まとめる」場面でのTチャート年表を作成する活動へとつなげた。

《「まとめる」場面での様子》

「まとめる」場面では、毎時間書きためてきたキーワードが書かれた付箋紙を使って、Tチャート年表を作成する活動を取り入れた。

まず、本単元で学習してきたことを学級全体で出し合い、学習内容を大きく7つのカテゴリーに分類した。それぞれ「武士の登場」「源平合戦」「鎌倉幕府」「元寇」「室町幕府」「武士の生活」「室町時代の文化」と名づけ、子どもたちはこれらをStage 1としたTチャートを作成した。

7つのTチャートを作成後、書きためてきた付

箋紙をStage 2として、それぞれのTチャートへ配置した。キーワードを配置後、Tチャート内のキーワードを参考にしながら、図2-7のようにTチャートを出来事の起こった順に配置した。キーワードを配置後、事象間の関連を表すため、つながりのあるもの同士を線で結んだ。そして、特に関連が見られるTチャート同士については赤色の線で結び、可能な範囲でその関係に名前をつけ、Stage 3として配置した。



図2-7 Tチャートを出来事の起こった順に配置

図2-8は、子どもが作成したTチャート年表の一部である。

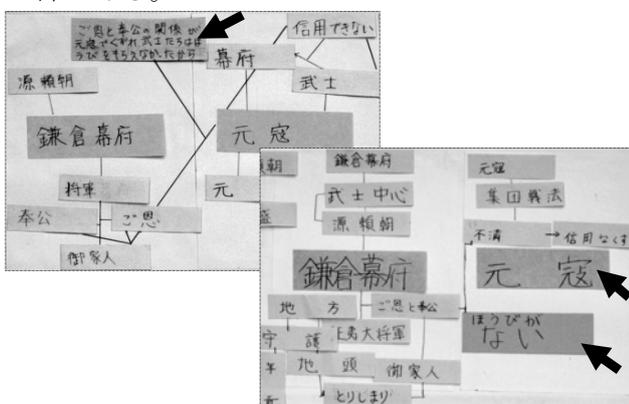


図2-8 子どもが作成したTチャート年表の一部
(矢印で示した付箋がStage 3)

鎌倉幕府のキーワードであるご恩と奉公の関係をTチャート年表内に表すとともに、元寇によりその関係が揺らいできたことについても同時に把握することができている。そして、自分なりの意味づけをしたことをStage 3として配置し、理解を深めようとする姿が見られた。また、Tチャート年表の活動は、子どもたち一人一人の発想によってオリジナルの年表を作成するので、楽しく活動できるとともに、お互いのTチャートを見比べることにより、多様な考え方に気づくことができた。

Tチャート年表を作成する活動の中で、図2-9のように、キーワード配置後も教科書や資料集、



図2-9 キーワード配置後も資料を使って再度調べる

ノート、学習プリントなどの様々な資料を活用して調べ学習をする姿が見られた。これは、Tチャート年表に表すことにより、キーワードの多少

を視覚的に把握でき、学習を深めようとする子どもたちの意識や、Tチャートでの関連づけに不安があり、関連づけをより確かなものにしようとする子どもたちの意識の表れと考えられる。

Tチャート年表作成後、Tチャートを活用して学習内容をまとめる活動を行った。本単元では、Tチャート年表を初めて作成したこと、学習内容の「つながり」を見いだすことに重点を置いたことから、学習したことから自分の考えを表すのではなく、事象間のつながりを意識しながら、学習内容をまとめた。以下は、武士が政治を始めたころについて、子どもがまとめた文章例である。

武士が最初登場したころは、有力者たちが命がけて領地を守っていた。武士が登場してもなく、源平合戦が行われた。その戦いは、源氏は源頼朝、平氏は平清盛を中心で戦い、結局源氏が平氏を西へとおいつめ、平氏が海へとむき、源氏が勝った。

その合戦で勝った源氏は、鎌倉幕府を開き、ご恩と奉公というものを作った。そして、ご恩と奉公で協力しながら政治をしていた。鎌倉幕府の政治を始めたころ、元が2度にわたり日本にせめてきた。このことを元寇という。最後は日本が勝利したが、武士達が全力で戦ったのに、将軍がほうびをあげられなかったから、武士は不満に思い、将軍の言うことを聞かなくなり、鎌倉幕府はほうかいした。

鎌倉幕府がほうかいし、その次は室町幕府が出来た。室町幕府の力は、義満のころが最も強く、応仁の乱をきっかけとして、義政のころから力が弱まった。このような戦いだけではなく、武士達はふだん武器の手入れや馬の世話などをして生活していた。

他にも室町時代にはたたみ・生け花・茶の湯・金閣・銀閣などの文化が生まれた。その時代、又四郎という人が銀閣の庭園を作っていた。その又四郎は、木や石などを動かしていた。そのためまわりの人から差別され、とても苦勞していた。このように武士がいた時代には、たくさんの政治や戦い、文化が生まれた。

これを見ると、鎌倉・室町時代の歴史的事象が出来事の起こった順にまとめられていることが分かる。また、様々な争いと武士の生活の様子、室町時代の世の中の様子と文化を関連づけながらまとめている姿が見られた。

さらに、子どもたちの中には、学習内容を出来事の起こった順にまとめた後、以下のように、今までの学習内容と比較したり、関連づけたりしながら、自分の考えを表す姿も見られた。

- いろいろな文化、政治があったけど、すべてすぐが変わっていたから人々は生まれた時代に合わせて生活をしていました。だからいろんな時代によって人の思い方もちがうし、生活も全然ちがったのだと思いました。
- この時代は朝廷ではなく武士が政治を動かすようになった。たしかに朝廷は統率力があっても戦いになれば弱い、武士は力が強いけれど統率力が弱い。おたがいに力をあわせればよい政治ができるのに残念だ。天皇中心の政治のほうがいいと思う。

(2) 授業から見てきたこと

これらの活動を通して、子どもたちにはどのような変容が見られたのだろうか。ここでは、2人の子どもたちに焦点を当て、Tチャート年表の内容、単元のまとめで書いた記述内容をもとに、分析を行った。なお、Tチャート年表については、キーワードの内容を鮮明にするため、それぞれの子どもが作成したTチャート年表を作成し直したものを使用している。

【A児の変容について】

A児は、歴史学習が大好きで、出来事の流れを楽しんでとらえようとする子である。様々な資料を活用しながら、多面的に追究活動を行う姿が見られる。また、文章を書くのが好きで、物事を柔軟に考え、その考えを堂々と発表することができる。社会科学習に対しても「あまり難しくない。いろいろなことが調べられる」と話している。ただ、覚えることについては苦手意識をもっている。

ア. Tチャート年表からの分析

図2-10はA児の「武士が政治を始めたころ」についてのTチャート年表である。各Tチャートのキーワードの数は、ほぼ同程度であった。キーワードの内容を見ると、授業時間内に資料から読み取った内容と、自分で調べた内容を組み合わせ、Tチャート年表上で関連づけながら配置をしている様子が分かる。チャート間を結ぶつながりについては多く見られた。社会の動きに関する各歴史的現象のつながり、そして社会の動きと人々の生

活・文化とのつながりに線を引いていた。

Tチャート間の関連については、2か所で見られた。源平の戦いと鎌倉幕府のつながりについては「平氏がめつぼう」と、元寇から室町幕府の成立のつながりについては「元寇でほうびがもらえず、武士の不満がつりめつぼう」と表している。

イ. 記述内容からの分析

A児は「武士が政治を始めたころ」の世の中について、以下のような書きまとめをすることができた。

【A児の「源頼朝と鎌倉幕府」の単元終了後のまとめ】

初めに武士が登場する。豪族が自分の領地を守るために武そうして、だんだんと武士へとなっていった。その武士の生活は質素だった。馬に乗り、弓や矢のけいこをしていた。武士の中でもそのころ強かったのは源氏と平氏だった。源氏が平氏に負け、平氏一族が政治を行うようになった。しかし、それからの戦いで平氏は源氏に負け、西へとにげたが、とうとう最後の壇ノ浦の戦いで平氏はめつぼうした。

次に源氏の源頼朝は鎌倉幕府を開いた。ご恩と奉公でうまく成り立っていた。それから元寇というモンゴルとの戦いがおきた。日本はどうか守れたが、新しい領地が手に入ったわけではなかった。なのでご恩と奉公ができず武士の不満がつつた。不満がつり、ついに鎌倉幕府がめつぼうした。そして、足利尊氏が室町幕府を開いた。第3代將軍足利義満は、日明貿易をし、栄え、金閣寺をたてた。第8代將軍足利義政は、銀閣を応仁の乱の後につたてた。

室町時代にはいろいろな文化ができた。能や雪舟のかいたすみ絵などがある。(424字)

A児がまとめた文章を見ると、鎌倉・室町時代について、出来事の起こった順に学習内容をまとめていることが分かる。特に、源平の戦いの結果鎌倉幕府が開かれたことや、元寇がきっかけで武士の不満がつり、鎌倉幕府の滅亡に至ったこと

などが明確に表されている。このまとめの文章を見ると、A児は各歴史的現象の時間的な前後関係を正確に把握していると考えられる。

しかし、室町時代の文化については、室町時代の世の中とのつながりを見いだしていないように思われる。A児以外にもこの傾向が見られたことから、室町幕府についてはプリントで時代の流れだけを学習したので、深いつながりを見いだせなかったのではないかとと思われる。

また、まとめる場面での学習問題が「武士が政治を始めたころの世の中についてまとめよう」であったことから、出来事を順に取りあげてまとめることに留まり、自分の考えをまとめることにまで至らずに、前述のようなまとめになったのではないかと考える。

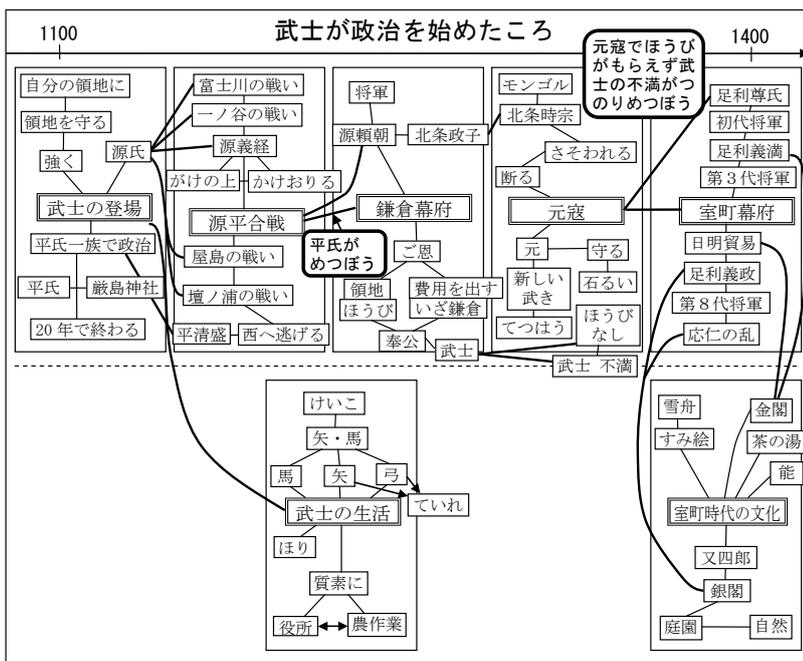


図2-10 A児の「武士が政治をはじめたころ」についてのTチャート年表
 カテゴリー…Stage 1, 構成要素…Stage 2, 意味づけ…Stage 3

〔B児の変容について〕

B児は、社会科学習の中で、特にインタビューで取材をしたり新聞形式でまとめたりするなどの活動については積極的に取り組む姿が見られる子である。しかし、追究活動になると、自主的に学習を進めることが苦手なようである。興味のあるものについても、調べ方や学習していることの意味をつかむことが難しく、学習内容が定着していないことが多い。また、文章化することが苦手で、発表の時間も自分の考えを発表することはあまり見られなかった。

ア. Tチャート年表からの分析

図2-11はB児の「武士が政治を始めたころ」についてのTチャート年表である。室町時代の文化に関するTチャートについては、多くのキーワードが配置されているが、他のTチャートについては室町時代の文化に関するTチャートに比べると、かなりキーワードの数が少ないことが分かる。また、その内容についても、各歴史的事象についての詳細な内容をつかむことができないものがほとんどであった。これは、子どもたちが調べた内容を中心に学習を進めたことにより、B児の調べ学習の内容と授業での学習内容につながりを見いだせなかったことや、調べ学習でキーワードを見いだすことが難しかったからではないかと考えられる。それに加えて、調べた内容を交流する際、他の友だちの調べたことを記録することができていなかったからではないかと考えられる。

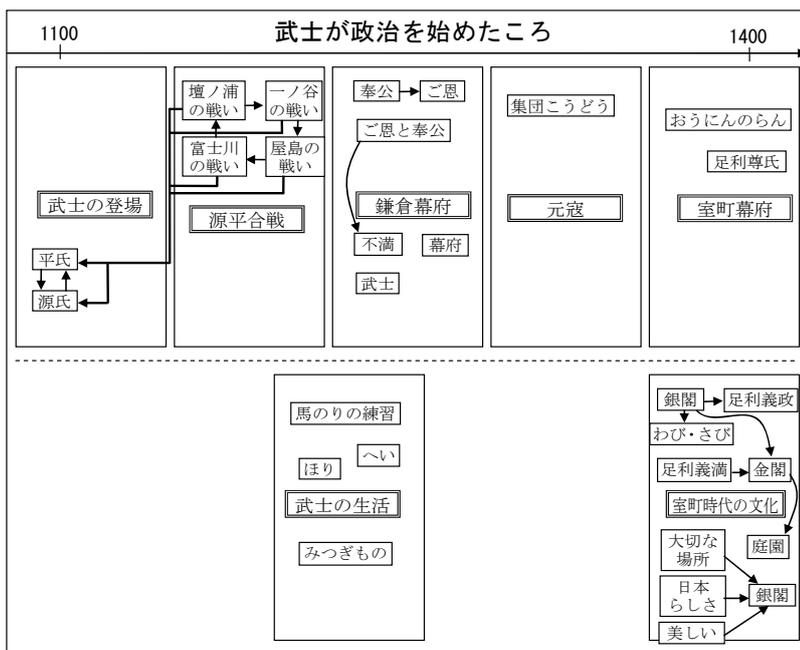


図2-11 B児の「武士が政治をはじめたころ」についてのTチャート年表
 カテゴリー …Stage 1, 構成要素 …Stage 2, 意味づけ …Stage 3

イ. 記述内容からの分析

B児は「武士が政治を始めたころ」の世の中について、以下のような書きまとめをすることができた。

【B児の「源頼朝と鎌倉幕府」の単元終了後のまとめ】
 平氏と源氏是对立し、富士川の戦いを1180年に静岡で、一ノ谷の戦いを1184年に兵庫で、屋島の戦いを1185年に香川で、壇ノ浦の戦いを1185年に山口で、いろいろな戦いをしました。はじめは源氏が西へ逃げていったけど、さいしゅうてきには平氏がまけました。
 鎌倉幕府では、ご恩と奉公がつくられましたが、元とのたかいで、武士と幕府の中にこんらんがおき、武士の中にふあんができた。室町幕府には、金閣と銀閣が作られました。銀閣の庭園を作ったのは、又四郎さんです。又四郎さんは、心を込めて作ったので、今も和がのこってる日本らしいところですよ。(264字)

B児がまとめた文章を見ると、源平の争いについてはそれぞれの戦いの起こった年を併記しながら平氏が戦いにやぶれたことについて出来事の起こった順に記述している内容は見られる。また、鎌倉幕府のキーワードであるご恩と奉公や元寇での幕府の混乱についての記述は見られる。

しかし、記述内容を詳しく見ると、源平の戦いで源氏が平氏を西へ追い詰めたにもかかわらず、B児の記述には「源氏が西へ逃げていった」とあった。また、元寇による世の中の混乱が起こった後、室町幕府の成立へのつながりに関する記述が見られないなど、Tチャート年表でのキーワードの少なさ同様、詳細な内容の把握ができていないことが、このような記述に至った原因ではないかと考える。

Tチャート年表でのキーワードの数が少ない子どもは、B児と同じように事象のつながりが見いだせず、断片的な記述で終始することが多く見られた。その原因として、各自が行った追究活動の内容に個人差が見られたこと、授業中に扱う資料を読み取る際に資料の読み取り方の支援が不十分であったこと、調べた内容を交流する際の記録方法など交流活動を理解に生かすための手だてが不十分であったことが考えられる。

次単元に入る前に、研究協力員と成果と課題について整理した。その中で、授業時間内で資料を読み取る活動を明確に位置づけることや、自分の考えを記述する時の支援の在り方、調べる活動の位置づけや支援の方法などについて検討した。

第2節 「徳川家光と江戸幕府」での実践

「源頼朝と鎌倉幕府」の実践で明らかになった課題を踏まえ、本単元を進めるにあたり、以下の点に留意しながら実践を行うことにした。

- 学力の低位な子どもへの支援のあり方
 - ・グループでの交流を増やす。
 - ・机間巡視で資料の読み取りに対する重点的な支援を行う。
 - ・考えをまとめる際の「まとめ方例」を提示する。
- 重要なキーワードの取り扱い方「共通のキーワード」
 - 子どもたちが選んだキーワードを紹介しながら、その中に「共通のキーワード」を盛り込む。
- 学習内容をより深めるための追究活動の位置づけ
- 【言語化①ーイメージの明確化】の活動を取り入れる資料の精選

本単元の目標は以下の通りである。

- 大名行列、鎖国などの徳川家光の政策に関心をもち、身分制度が確立して武士による政治が安定したことを理解するとともに、この時代が開いた海外との交流がもつ役割について目を向けるようにする。
- 絵画資料や年表、写真、絵、地図、文章資料などの各種資料を活用して、江戸幕府の大名統制や身分制度、海外政策などの支配体制の様子について調べ、調べたことを目的に応じた方法でまとめるとともに、徳川家光の業績や江戸幕府の政治が我が国の国家・社会の発展に果たした役割を考えるようにする。(28)

この目標を達成するため、言語化の活動を取り入れた指導計画(p.33-【資料②】)を作成し、実践を行った。

(1) 授業中の子どもたちの様子 《「出会う」「つかむ」場面での様子》

「出会う」「つかむ」の場面では、資料「金沢藩(加賀藩)の参勤交代図」を提示し、資料から気づいたことを学習プリントに書き込む【言語化①ーイメージの明確化】の活動を取り入れた。前単元で資料から分かる情報を書き出す【言語化①ーイメージの明確化】の活動に慣れてきたこともあり、全員が前単元よりも多くの情報を書き出していた。書き出した情報については、小グループで学習プリントを見せ合いながら交流することにより、多面的な資料の見方に気づくことができた。図

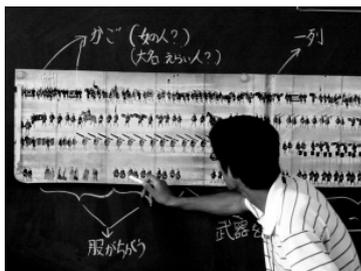


図2-12 資料からの気づき・疑問点を全体で交流する

2-12のように、学級全体でも板書に資料を拡大して掲示し、小グループでは気づかなかったところについても交流することができ、資料の見方を広げることができた。

資料から分かる情報を学習プリントに書き出した後、図2-13のように大名行列について気づいた点や疑問点を様々な資料を用いて調べる活動を行った。大名行列が莫大な費用と長い時間をかけて行われたこと、大名の妻子を江戸に人質として住ませたことなどを調べ、同じ学習プリントに書き込んだ。

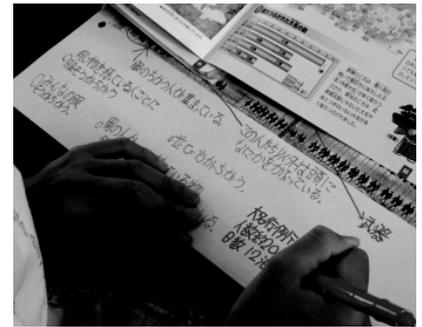


図2-13 資料からの気づきや疑問について、資料を使って調べる

また、調べる中で大名行列は参勤交代という制度の下で行われたことや、その制度をつくった徳川家光と江戸幕府に子どもたちの興味が向いていった。資料「将軍と大名」「生まれながらの将軍とは？」などの読み取りを通して、「家光って、そんなに力があつたのかな」「どうやって大名たちに言うことを聞かせたんだろう」という声が聞かれた。そこで、学級全体の学習問題を

徳川家光は、どのようにして幕府の力を強めていったのだろうか

と設定し、追究活動を行った。

《「調べる」場面での様子》

調べる活動では、子どもたちの追究したい疑問を集約しながら各時間で学習問題を設定し、追究するきっかけとなる資料を提示して学習を進めた。その際、資料を学習プリントに印刷し、分かったことを書き出す【言語化①ーイメージの明確化】の活動を取り入れ、学習問題を解決するための情報を取り出すようにした。

第2時では「なぜ、幕府は大名たちに参勤交代をさせたのだろうか」という学習問題で、追究活動を行った。指導者は資料「おもな大名の配置」「金沢藩の支出」を用いて学習プリントを作成し、幕府が各大名たちに参勤交代を行わせた背景に迫ろうとした。その際、資料「おもな大名の配置」には、当時の大名の種別である「親藩」「譜代」「外様」という用語が出てくることから、先にそれらの用語についての説明をしてから資料の読み取りを行った。

子どもたちは資料「おもな大名の配置」から、「徳川家に近い大名は江戸から近いところや大坂や京都などの大事なところにいる」「関が原の戦い以後に味方になった大名は江戸から遠い」などを読み取っていた。また、資料「金沢藩の支出」

から、「藩内での費用がそれほど多くない」「江戸での支出がかなり多いのは、参勤交代の費用がかなりかかるから」ということを読み取っていた。

それぞれの資料から読み取ったことを書き出すことにより、各資料のつながりを見いだすことができ、参勤交代が各大名に与えていた負担の大きさを理解することができた。子どもたちからは、「後から味方になった大名達には、幕府に逆らえないように参勤交代でいっぱいお金を使わせて、力をつけさせないようにした」「江戸に家族が人質になっているので、江戸に行かなければ家族が危ないし、1ヶ月かけてでも行かなければならなかったんだろうな」という考えが出ていた。そして、参勤交代の根拠となった資料「武家諸法度」を提示し、参勤交代以外にも大名が厳しく取り締まられた内容を読み取る姿が見られた。その中で、子どもたちから「大名がこれだけ厳しく取り締まられているのなら、そこに住んでいる人々はどうなっているのかな」という声が聞かれた。

第3時では、「江戸時代の人々の生活について調べよう」と設定し、資料「江戸時代の身分ごとの人口の割合(江戸時代の終わりごろの割合)」を読み取る活動を行った。子どもたちは江戸時代の人口全体の約85%を占めた百姓をわずかに約7%の武士が支配していたことに気づき、驚いていた。そして、人口の大部分を占める百姓の暮らしについて、資料「百姓が負担するいろいろな税や役」「百姓の生活の心得」から読み取る活動を行った。資料「百姓の生活の心得」では百姓の生活を厳しく取り締まっている様子を、資料「百姓が負担するいろいろな税や役」では、百姓としての仕事以外にも多くの仕事をしたり、特産物に税金がかかり苦しい生活をしたりしている姿を想起することができた。それらの情報を得たことにより、子どもたちからは「江戸時代は多くの人たちがきびしい生活をしてたんだ」「幕府のために一生懸命働いていたんだ」などという声が聞かれた。

このように、複数の資料から情報を書き出し、それらを照らし合わせることにより、子どもたちは資料相互のつながりを見いだすことができた。そして、見いだしたつながりをもとにして、当時の世の中を想起するような意見が多く見られた。

本單元においても「調べる」場面では、1時間の中でキーワードを数個選び出し、そのキーワードを使って1時間の学習のまとめをノート2～3行で文章化する【言語化②－事象の関連づけ】の活動を大切にしてきた。「源頼朝と鎌倉幕府」の実践

と比較すると、子どもたちが資料相互のつながりを実感しながら1時間の学習のまとめをする姿が多く見られた。これは、資料を全員同じものにして、各時間の最初に読み取る活動を行ったことで追究の方向性が定まり、話し合う中でキーワードを見いだしやすくなり、つながりをもたせながら文章化することが出来たのではないかと考える。

《「まとめる」場面での様子》

本単元のTチャート年表は、「源頼朝と鎌倉幕府」の実践を踏まえ、以下の2点を改良した。

1点目は、江戸時代の社会の動きをとらえさせる方法である。武家諸法度など国内の政治に関する内容と鎖国やキリスト教の禁止など外国の国々との政治に関する内容を同じ時期に学習する。そこで、本単元でのTチャート年表は、社会に関する動きを国内に関するTチャートを配置する段と外国の国々とのかかわりについてのTチャートを配置する段の2段に分け、人々の生活についてのTチャートを配置する段と合わせ、合計3段のTチャート年表を作成することにした。

2点目は、既習事項とのつながりをとらえさせる方法である。「徳川家光と江戸幕府」の前の単元である「3人の武将と全国統一」とのつながりを見いだしやすくするため、Tチャート年表の左端に「織田信長」「豊臣秀吉」に関するキーワードを配置するスペースを設けることにした。

この2点を改良したTチャートを以下のような手順で作成した。

まず、本単元で学習してきたことを学級全体で振り返り、その内容を分類しながら板書し、「武家諸法度」「(江戸時代初期の)貿易」「鎖国」「海外との交流」「身分制度」という5つのカテゴリーを設定し、子どもたちはTチャートのStage 1として配置した。そして、国内の動きに関する「武家諸法度」のTチャートを1段目に、外国の国々との関わりに関する「(江戸時代初期の)貿易」「鎖国」「海外との交流」のTチャートを2段目に、人々の生活や文化に関する「身分制度」のTチャートを3段目に配置した。Tチャート配置後、今まで書きためてきたキーワードが書かれた付箋紙を各Tチャートに配置した。キーワード配置後、Tチャート内、Tチャート間の関連づけを線で表し、その後Tチャート間の関連づけに意味づけをするStage 3を配置し、Tチャート年表を完成させた。

ここで、「源頼朝と鎌倉幕府」での実践と異なる子どもの姿が2点見られた。

1点目は、本単元のTチャート年表の改良点で

ある前単元の学習内容をTチャート年表に位置づけたことにより、図2-14のように前の時代とのつながりを見いだし、Tチャート上に表すことができたことである。各単元の学習が独立したのではなく、事象間のつながりを意識できたと考える。

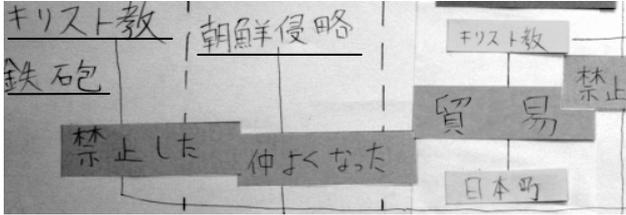


図2-14 Tチャート年表で前単元の学習内容(下線部)とのつながりを見い出す

2点目は、Tチャート内の関連づけを表す線を引かない子どもが多く見られたことである。その一方で、Tチャート間の関連を表す赤い線については、線の数が増加する子どもが多く見られた。これは、Tチャート一つあたりのキーワード数の増加もその要因の一つであるが、今まで書きためてきたキーワードを分類することで関連づけ、つまり学習内容の整理を行うことができたと考える。そして、Tチャート間のつながりである歴史的事象相互の関連の見いだしに重点を置いてTチャート年表を作成することができたと考える。

Tチャート年表の作成後、本単元について自分の考えをまとめる活動を行った。図2-15は、子どもたちに提示した考えのまとめ方例である。

自分の考えのまとめ方例

私が江戸時代の学習で心に残っていることは3つあります。

1つめは、○○○○です。

(資料がのっていたもの)の(ページ数)にある(資料名)を見て、(資料から分かったこと)ということが分かりました。このことから、私は(思ったこと)と思いました。

2つめは、△△△△です。

(資料がのっていたもの)の(ページ数)にある(資料名)を見て、(資料から分かったこと)ということが分かりました。このことから、私は(思ったこと)と思いました。

3つめは、□□□□です。

(資料がのっていたもの)の(ページ数)にある(資料名)を見て、(資料から分かったこと)ということが分かりました。このことから、私は(思ったこと)と思いました。

江戸時代の学習をして、私は(学習をして思ったことや考えたこと)と思いました。

図2-15 考えのまとめ方例

子どもたちはまとめ方例の形式に沿って学習内容をまとめることで、根拠を明らかにしながら筋道立てて文章を書くことができた。特に、自分

の考えを文章化することが苦手な子どもにとっては、抵抗なく取り組むことができたようである。

また、まとめ方例は学習内容の中から心に残った3点を選び、自分の考えを記述するように構成している。3点を深く追究することで、それぞれのつながりを見いだし、江戸時代を概観するような考えを構成できると考えた。特に、まとめ方例の最後の段落(学習して思ったことや考えたこと)の部分は、概観するような考えが最も表れるところではないかと考え、分析を行った。以下は、子どもがまとめた文章の中から、最後の段落にあたる部分を抜き出したものである。

- 江戸時代の学習をして私は、幕府が参勤交代や鎖国などで平和な世の中にしようと工夫していたのだと思いました。でも、同じ人間なのに、身分が違い苦しい生活をおくっていた人々のことも考えてほしかったと思います。
- 江戸時代の学習をして、差別されてきた人々が伝統を作ってくれていなかったら今の伝統もないと思います。だから差別されてきた人々も幕府と同じようにとても大切な役目なんだと思いました。
- 江戸時代は徳川家光だけでなく、百姓や差別されていた人々も力を強めたんだと思いました。理由は、百姓の人々はきつい心得の中でもがんばって仕事をしていたので、きっと米の生産量も増えたと思うからです。差別されていた人々は、社会や文化を支えていたからです。江戸時代は戦いなどが全然なくて平和だと思いました。
- 江戸時代はとてもきびしい社会だと思いました。でもそういうきびしい社会の中でも江戸時代の人たちは一生懸命生きて、一生懸命江戸幕府のお役に立てるようにがんばってきたと思いました。

子どもたちの記述には、幕藩体制を整え強固な支配体制の基盤を作ろうとした江戸幕府の姿に対して、学習内容を踏まえながら当時の世の中について概観している様子が見られた。特に、徳川家光が行った政策に一定の理解を示しつつ、百姓や差別されてきた人々などの姿を思い描き、共感している様子がよく表れていた。

また、次のような歴史のつながりや歴史的なものの見方や考え方につながる記述も見られた。

- 江戸幕府や武士の力はすごく強かったことが分かりました。そして、歴史はどんな時代と時代でもちょっとした共通点があり、つながっていることが分かりました。
- 江戸時代の学習をして、私は昔には苦勞した人もいれば苦勞していない人もいるけど、昔と現在とはやっぱりちがいがあなあ、と思いました。政治を進める人がちがうとちがう世の中ができるんだと思いました。

これらの記述は、今までの学習内容を意識することで初めて表れるものであると考える。本単元のTチャート年表で前の時代である戦国時代の内容を位置づけたことも、これらの記述が表れた要因の一つではないかと考えられる。

(2) 授業から見てきたこと

〔A児の変容について〕

ア. Tチャート年表からの分析

図2-16はA児の「江戸に幕府が開かれたころの世の中」についてのTチャート年表である。前述のように、A児も各Tチャート内の関連づけを表す線は見られなかった。特に、A児の場合は、各Tチャートに数多くのキーワードを貼っていることから、線を引くスペースがなかったようである。

各Tチャートのキーワードの内容を分析すると、Stage 1の各歴史的事象を説明するために必要なキーワードが正確に位置づけられている。各時間で扱った資料から丹念に情報を読み取ったことがTチャートにも反映されていると考えられる。Tチャートの配置についても、出来事の起こった順に正しく配置されている様子が分かる。

また、Tチャート間の関連については、2ヶ所で見られた。1つ目は江戸時代当初に行われていた貿易が、鎖国政策によって「長崎」で行われたこと、2つ目は徳川家光の政策により、身分制度が改められたが、「差別」は残ったというものであった。

ただ、「貿易」のTチャートにある「朝鮮使節団」というキーワードは、正しくは「朝鮮通信使」である。用語の正しい理解ができていなかった部分については、すぐに指導に生かすことができた。

他の子どもに見られた前単元「3人の武将と全国統一」の学習内容とのつながりは、A児には見られなかった。

イ. 記述内容からの分析

A児は「江戸に幕府が開かれたころの世の中」について以下のようなまとめを行った。

【A児の「徳川家光と江戸幕府」の単元終了後のまとめ】

私が江戸時代の学習で心に残っていることは3つあります。

1つめは参勤交代の大名の負担です。教科書の62ページにある「家光が大名をしたがえる」というのを学習して、大名は武家諸法度で定められた参勤交代で江戸まで歩き、江戸に着いたら江戸城の改修をして大変だったことが分かりました。このことから私は、大名は幕府に不満がつつたと思います。しかし、参勤交代の費用などでどんどんお金がなくなり、幕府に反抗できなかったので私ならかなり腹が立つと思います。

2つめは貿易のことで。教科書の68ページを学習して、朝鮮しん略以降とだえていた朝鮮との交流が家康によって再開されたことが分かりました。このことから私は、家康のころ朝鮮との交流がまた再開され、鎖国してからも交流があり、朝鮮の文化が日本に入ってきて、現代にもつながっていると思います。

3つめは身分制度のことで。教科書の64ページと65ページを学習して、江戸時代には身分がはっきりして武士が支配する世の中になったということが分かりました。このことから私は、差別されてきた人々についてどんな気持ちになったのだろうと思います。私だったらそんな生活はいやで反抗すると思います。でもそんな生活をしていても伝統文化を伝えたというのはいすばらしいと思います。

江戸時代の学習をして外国の文化はあまりなく日本独特の文化が残ったと思います。(578字)

「源頼朝と鎌倉幕府」の単元のまとめから変化したことは、考えのまとめ方例を提示したことにより、単なる学習内容のまとめから、学習内容をもとに自分の考えを述べる記述が見られるようになったことである。学習内容の中から考えを深める部分を3点に絞り、活用した資料、資料から分かったことを併記しながら、自分の考えを述べることができた。特に、1点目の参勤交代では幕府に反抗できない腹立たしき、2点目の朝鮮との交流では、朝鮮の文化が現代にもつながっていることなど、現在の自分とのかかわりを考えながら文章化している様子が分かる。また、2点目の朝鮮との交流の記述の中で、「朝鮮侵略」という言葉が使われていた。これは前単元「3人の武将と全国統一」での学習内容であり、Tチャート年表にも位置づけられている。Tチャート年表では前単元の学習内容とのつながりは見られなかったが、Tチャート年表上に配置されていることにより、記述にも活用できたのではないかと考える。

しかし、単元全体を概観する最後の段落の記述では、「日本独特の文化が残った」とあり、2点目の朝鮮との交流との関連と結びつけた記述になるような指導の在り方を考える必要があった。

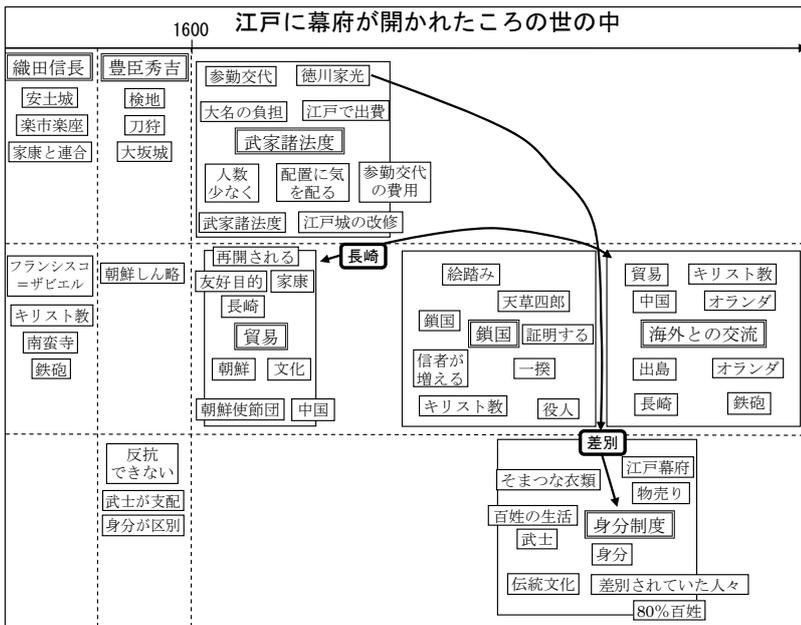


図2-16 A児の「江戸幕府が開かれたころの世の中」についてのTチャート年表

年表 カテゴリー …Stage1, 構成要素 …Stage2, 意味づけ …Stage3

〔B児の変容について〕

ア. Tチャート年表からの分析

図2-17はB児の「江戸に幕府が開かれたころの世の中」についてのTチャート年表である。

関連づけの傾向については、「源頼朝と鎌倉幕府」と同様、数ヶ所でTチャート内、Tチャート間の関連づけが見られた。関連づけが見られた部分については、正確につながりを見せている。1段階目の「江戸」「徳川家光」「参勤交代」「人質」のつながり、2段階目の「キリスト教」「絵踏み」「鎖国」のつながりなど、学習したことを関連づけながらTチャート年表に表していた。

しかし、Tチャート年表上で関連をより多く見いだすためには、キーワードの数が少なかった。また授業時間内で指導者が他の子どものキーワード例を紹介しながら必要なキーワードについて触れていたにもかかわらず、それらの内容がB児のTチャート年表上に表されていない。各TチャートのStage 1にある歴史的事象を説明するには、必要なキーワードを確実に位置づける方法と、Stage 1を構成するキーワードであるStage 2の数を増やすことが必要であると考えられる。

また、本単元で取り組んだ前単元とのつながりをTチャート年表上に表すことについても、個別でノートからキーワードを書き出したことから、B児にとっては、必要なキーワードが見いだせず、豊臣秀吉に関する3つのキーワードのみを年表上に配置したものと考えられる。

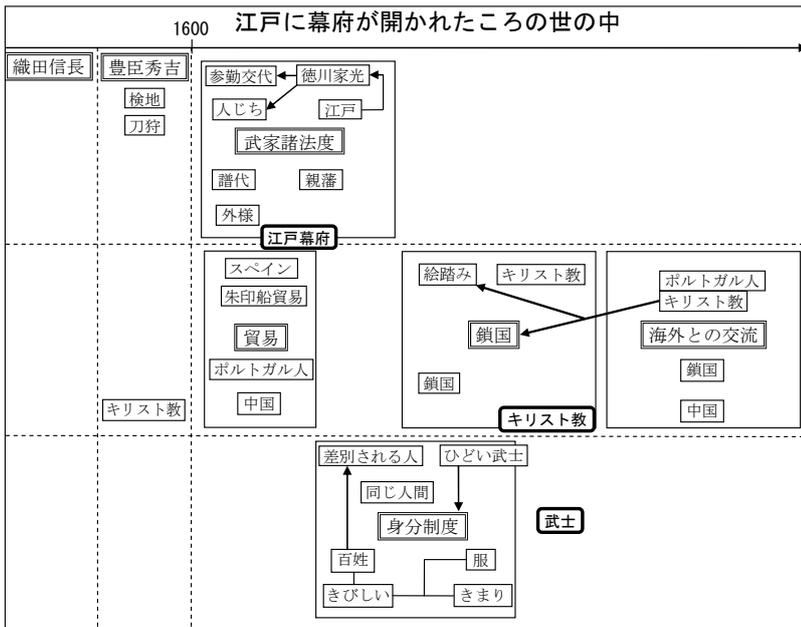


図2-17 B児の「江戸幕府が開かれたころの世の中」についてのTチャート年表 **カテゴリー**…Stage1, **構成要素**…Stage2, **意味づけ**…Stage3

イ. 記述内容からの分析

B児は「江戸に幕府が開かれたころの世の中」について以下のようなまとめを行った。

【B児の「徳川家光と江戸幕府」の単元終了後のまとめ】

私は江戸幕府のことを知り、心に残ったのは3つあります。
 1つめは徳川家光の参勤交代です。教科書のP.60～61の一番上の写真を見て、こんな大勢で何をしているのかなと思いました。
 2つめは鎖国のところの絵ふみです。私はその時代、絵をふむかふまないかで人生が大きく変わるんだと思った。
 そして、私が一番心にのこり心があったのは、身分制度です。身分制度は本当にひどいことです。差別されていた人はきびしいきまりと戦い、武士にくんでいたと思った。でも、自分たちができることをさがし、やったところがすごい。
 この3つを学んで感じたこと、それは上にいるものは下をけらいいにし、自分中心で生きていたことが分かった。参勤交代は大名は本当にいやだと思った。でもやらないと子も死ぬし妻もしぬからやらないとしかたないと思う。絵踏みは、自分のきもちをだせば死ぬからいやでも絵をふまないとだめだろうし、差別はちゅうとはんぱじゃなくて本当にきびしかったと思う。同じ人間なのに…。私は江戸はひどい時代だと思った。(435字)

B児についても、まとめ方例を提示したことによって、「参勤交代」「絵踏み(鎖国)」「身分制度」の3点から江戸時代について概観しようとしている。特に、3点目の身分制度については、様々な資料から厳しい生活を強いられた百姓の生活や差別されていた人々の生活の様子を読み取り、B児が当時の人々の立場に立って考えている様子が分かる。さらに、単に厳しい生活について悲しい気持ちを表すだけでなく、厳しい生活の中でも工夫や努力をしてたくましく生きている人々の姿に共感している記述も見られた。また、最後の段落である本単元を概観する記述について、「同じ人間なのに…」という記述があり、差別の厳しさをB児なりに受け止めた姿としてとらえられる。

しかし、1点目の武家諸法度についての記述が、大名行列の資料を見たときの疑問にとどまっている。これは、大名行列の資料と武家諸法度の学習内容が繋がっていないことが考えられる。また、前単元のキーワードの配置が少なかったことが、前単元とのつながりを踏まえた記述につながらなかったと考えられる。

1時間ごとの学習内容の中から必要なキーワードを書き出すこと、そして事象間のつながり、特にStage 3の事象間の関連を表すキーワードを生み出しながらTチャート間のつながりを見いだすことで、単元全体を概観できるような考えや、前後の時代相を認識した考えを記述することができる。次単元の実践に生かした。

第3節 「明治維新をつくりあげた人々」での実践

「源頼朝と鎌倉幕府」「徳川家光と江戸幕府」の実践を終え、資料から分かる情報を付箋紙に書き出す【言語化①ーイメージの明確化】の活動や、Tチャート年表を作成すること、単元のまとめにおいて自分の考えを文章化することに慣れてきた子どもたちの姿が見られた。

しかし、考えを文章化することはできているが、第1章第2節で述べた思考の深化の姿が見られた子どもは、それほど多くなかった。また、「まとめる」場面において作成していたTチャート年表は、毎時間書きためたキーワードを各Tチャートに分類するところから始めていたこともあり、Tチャートの作成に費やす時間が多かった。

そこで、この2点を解決するために、本単元の学習活動では次のような改善を行った。

- 思考の深化を促すために
 - ・交流活動の実施
 - ・交流活動後に自分の考えを再構成する場の設定
- Tチャート年表の作成時間を短縮するために
 - ・毎時間Tチャートを作成し、クリアファイルにストックする。
 - ・Tチャート年表作成時は、Tチャートの操作から行えるようにする。

本単元の目標は以下の通りである。

- 黒船の来航、明治維新、文明開化、大日本帝国憲法の発布などに関心をもち、日本が欧米の文化を取り入れつつ、廃藩置県や四民平等などの諸改革を行い、近代化を進めたことを理解できるようにするとともに、日本の近代化に貢献した先人の努力を思う心情をもつようにする。
- 絵画資料や年表、写真、文章資料、関係図などの資料を効果的に活用して、黒船の来航や明治維新、文明開化、大日本帝国憲法の発布などについて調べ、調べたことを目的に応じた方法で適切にまとめることができるようにし、明治維新をつくりあげた人々の業績が日本の国家・社会の発展に果たした役割を考えるようにする。(29)

この目標を達成するため、言語化の活動を取り入れた指導計画(p.34-【資料③】)を作成し、実践を行った。

(1) 授業中の子どもたちの様子 《「出会う」場面での様子》

「出会う」場面では、資料「江戸時代末ごろの日本橋近くの様子(江戸, 1860年ごろ)」と資料「明治時代初めの日本橋近くの様子(東京, 1880年ごろ)」を比較しながら、分かった情報を書き出す【言語化①ーイメージの明確化】の活動を行った。

図2-18は、2つの資料から分かる情報を付箋紙に書き出し、直接資料に貼る様子である。



図2-18 Tチャートに資料を貼りつけ、資料から分かる情報を付箋紙に直接書き出す

2つの資料は、江戸時代末期から明治時代初期にかけての急激な世の中の変化を表すものであることから、Tチャート年表に資料を貼りつけ、分かる情報を付箋紙に書き出し、直接貼ることとした。このようにして、2つの資料から分かる情報を書き出し比較することにより、ザンギリ頭や洋服の登場など人々の髪形や服装が変化したこと、洋傘などの持ち物が変化したこと、刀を持っている人がいなくなり警棒を持った警察官がいること、ガス灯や馬車が街に見られるようになったことなどを読み取った。この変化は文明開化と呼ばれたことを指導した後、他にも文明開化で人々の生活や文化などについて変化したことはないか、教科書やその他の資料を活用しながら調べさせた。

指導者は図2-19のように、板書へ掲示した資料に子どもたちの気づきをキーワードにして貼り、全体交流の際の手だてとした。



図2-19 2つの資料からの気づきを板書にキーワードで表し、問題意識を明確にする

この活動により、それまで学習プリントからキーワードを書き出すことにかかっていた時間を短縮することができた。また、2枚の資料から書き出した情報を比較し、20年間で世の中にどのような変化が起きたのかという今後の追究活動の方向を意識づけることができた。

《「つかむ」場面での様子》

「出会う」場面で20年間の変化に興味をもった子どもたちから、「江戸時代はいつ終わったのか」という疑問が出てきた。そこで、「なぜ江戸幕府は終わったのか」という学習問題を設定し、追究活動を行った。

まず、資料「ペリーの来航」からペリーが来航した時の様子について、分かる情報を書き出した。

そして、ペリーの来航によって幕府や人々のくらしにどのような影響があったのかを、教科書や様々な資料を使って調べ、短い文でまとめた。その後、資料「徳川慶喜は、政権を朝廷に返すことを決めました」などの資料を活用しながら、第15代将軍徳川慶喜が大政奉還を行い、江戸幕府が終わったことをつかむことができた。

このようにして、子どもたちは江戸幕府が終わるまでの流れについて把握することができた。そして、新政府が行う様々な改革である明治維新という用語を紹介しながら、学級全体の学習問題を

明治維新によって、世の中はどのように変化したのだろうか」と設定し、追究活動を行った。

その中で、討幕運動に関わり新政府をつくった主要なメンバーとして坂本龍馬、大久保利通、西郷隆盛、木戸孝允らが登場した。そこで、これらの人物の概略を教科書や資料で紹介した後、家庭での調べ学習として、これらの人物から1人を選択し、討幕運動や新政府樹立にどのように関わったのかを調べ、単元のまとめの考えを構成する際に生かすことができるようにした。

《「調べる」場面での様子》

第3時は、「明治政府はどのような国づくりをめざしたのだろうか」という学習問題で追究活動を行った。図2-20は、資料「5か条の御誓文」から明治政府がめざした国づくりについて読み取る【言語化①-イメージの明確化】の活動の様子である。

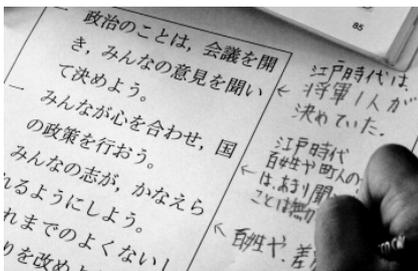


図2-20 前単元の学習内容と比較しながら資料を読み取る

2つの単位での実践を通して、子どもたちに前の時代と比較するという意識が生まれているためだと思われるが、指導者

の指示がなくても「江戸時代と比べて～」「江戸時代は～」と前の時代の学習内容を踏まえながら資料を読み取っている姿が見られた。前の時代と比較することにより、江戸幕府と明治政府がめざしていた国の姿の違いを明確にとらえることができた。

その後、5か条の御誓文を具現化する諸政策について、教科書や様々な資料を用いて調べ、まとめることができた。

第5時は、明治政府の諸改革の中で学校制度についての追究活動を行った。この学習では、学校制

度ですべての子どもたちが教育を受けることができたのかを調べるために、資料「小学校入学者の割合」から分かる情報を書き出す【言語化①-イメージの明確化】の活動を行った。その際、指導者はグラフの読み取りを促すため、図2-21のように棒や矢印を使いながら、年代ごとの変化をとらえることができるように支援を行った。子どもたちは「男子と女子の入学者の割合に差がある」「入学者の割合が男子も女子も同じようになっている」

「1890年から1900年の間に急に入学者の割合が増えている。特に女子のほうが男子より増え方が急だった」などを読み取ることができた。

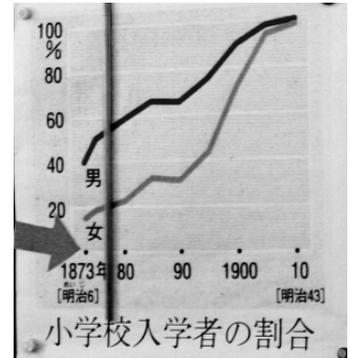


図2-21 棒や矢印を活用してグラフの読み取りを支援

各時間の終わりには、今までの2つの実践と同様、それぞれの時間で大切な言葉をキーワードとして選び出し、それらのキーワードを使って1時間のまとめをする【言語化②-事象の関連づけ】の活動を行った。子どもたちは、キーワードの選び出しや1時間の学習のまとめにも抵抗なく取り組むことができるようになった。キーワードについては、今までは1枚の台紙にまとめて貼っていたが、本単元では毎時間Tチャートの用紙に貼ってクリアファイルにためておき、Tチャート年表の作成が効率よく行えるようにした。

《「まとめる」場面での様子》

まず、本単元のTチャート年表を作成する活動を行った。今まで作成してきたTチャートをクリアファイルから取り出し、図2-22のようにTチャート年表上に出来事の起こった順に配置した。今までのTチャートの作成方法と違い、各時間で作っておいたTチャート进行操作するところから作業を始めることができるので、作成時間をかなり短縮することができた。

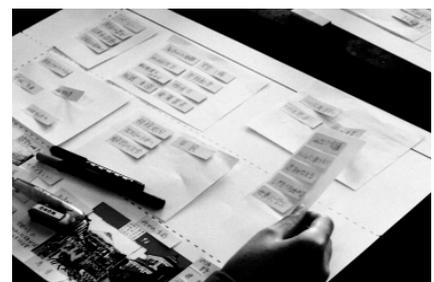


図2-22 作成しておいたTチャートをTチャート年表上に配置する

Tチャートの配置が終了後、それぞれのT

チャートにStage 1の設置を行った。学級全体で学習内容を確認しながら各TチャートのStage 1に名前をつけた。その後、Tチャート内の関連づけとTチャート間の関連づけを行い、Tチャート間の関連づけにはStage 3を配置して意味づけを行い、Tチャート年表を完成させた。

Tチャート年表を作成する中で、今までの実践とは違う子どもたちの姿が2点見られた。

1点目は、Tチャート年表を短い時間で作成する姿である。2単元での実践の積み上げによる作成への慣れも考えられるが、最大の要因は「出会う」場面でTチャート年表に資料を貼り付け、資料から分かったことを付箋紙で直接書き出したことや、「つかむ」「調べる」場面で各時間の終末にTチャートを作成したことなど、少しずつTチャート年表を作成したことであると考える。

2点目は、Stage 3の配置する数が、今までの実践と比べて増加したことである。ほとんどの子どもがStage 3を配置することができた。また、そのStage 3の内容は、関連づけの意味をキーワードで書いているものの他にも、キーワードに表さずに文章で書いてあるものや、それらの考えについて自分の考えをまとめているものも見られた。

Tチャート年表の作成後、前単元と同様、図2-23のように、Tチャート年表と考えのまとめ方例を活用しながらノートに自分の



図2-23 Tチャート年表とまとめ方例を活用して、考えをまとめる

の考えをまとめる活動を行った。考えを文章に表す際、自分の考えを再構成できるように、本単元ではノートに自分の考えをまとめる際に1行ずつ空けて書くように指導し、考えを再構成できるようにした。

Tチャート年表の作成と自分の考えをまとめた後、小グループに分かれて考えを交流する活動を行った。



図2-24 Tチャート年表を活用した考えの交流

図2-24のように、発表者は自分の考えの根拠をTチャート年表で示しながら、グループの他の人に発表する姿が見られた。Tチャート年表を提示しながら発表す

ることにより、聞き手が発表者の考えを把握しやすかったと考える。

考えの交流後、交流した内容をもとに、自分の考えを見直し、空けておいた行に加筆・修正をしながら再構成することができた。これらの姿から、小グループで考えを交流し、再構成する過程を通して、【言語化③ー思考の深化】が行われたと考えられる。以下は、子どもがまとめた文章の中から、明治時代を概観する考えが表れている部分である、まとめ方例の最後の段落(学習しておもったことや考えたこと)の部分抜き出したものである。

- 明治時代の学習をして、私は江戸時代のときとは違う政治をしようとした政府の動きはいいと思いますが、差別されていた人がいたり、国民のことをあまり考えていなかったりと、5か条の御誓文が実現できていませんでした。やはり国民のことを考えてほしかったと思いました。
- 明治時代の学習をして、日本の政治や社会のしくみ、外国との関係が大きく変わったなと思いました。それにもない、人々の生活や文化も変わったということが分かりました。それが今の日本に生かしていると思いました。
- 明治時代の学習をして、私は明治政府が身分制度を改めることについて真剣に考えた時代で、その中の国民の反乱などにより戦争が行われたりするなど、明治時代に起こった出来事は全部身分制度にかかわるんじゃないかなと思いました。でも、そんな中で日本の国民のことを一番に思い、立ち向かっていった人々はたくましいなと思いました。
- 今の時代とは違い、身分の差があったため、いろいろな生活の不便さを改めて知りました。私たちは今、何の不自由もなく自由にくらしています。しかし、いろいろな資料を見ていると、明治は身分制度は確かに少なくなっていますが、多少の不便を感じました。私たちは昔の人々のおかげにより、ずっとずっとよいくらしをしています。しかし、私たちの楽なくらしのうらには、昔の人の苦勞と苦しみがあることが分かりました。
- 明治時代の学習をして、私は政治のほうではいろいろなことが発展していい時代だと思うけれど、人々の生活のほうは比べてみると差別された人たちはあまり満足したくらしができていないと思います。もうすでに、今の平成と同じところもあったし、また全然違うところもありました。そこで私は今も少しある「ぼ金活動」なんかがあると貧しいくらしをしていた人たちは助かると思います。「もしも自分たちがそんなくらしをしていたらどんなに苦勞するか」っていうことを、天皇やいろいろな人たちに知ってもらっていけば、明治時代は変わっていたと思います。
- 明治時代の学習をして、ぼくは時代の移り変わりや明治政府の政治には外国が大きく関係していたのだなと思いました。そして明治政府は人々のくらしを豊かにしようとして苦勞していたけれど、家の貧しさや場所によって新しい制度が実行されていなかったのも、明治政府の政治は大変だったのだらうと思いました。それでも人々の生活は少しずつ楽で豊かになってきて、現代に近づいてきているということを感じました。

これらの記述には、各事象の関連をつかみながら明治時代を概観し、当時の人々の思いに共感するような考えや時代相を認識した考え、自分の生活とのかかわりを意識した考えが見られた。

(2) 授業から見てきたこと

〔A児の変容について〕

ア. Tチャート年表からの分析

図2-25はA児の「明治維新が行われたころの世の中」についてのTチャート年表である。今までの2つの実践と比べ、Tチャート1つあたりのキーワード数が増加していることが分かる。これは、Tチャート年表を作成していく中で、より理解や思考を深めたい部分についてキーワードを増やす活動を取り入れたことが、A児が意欲的にキーワードを増やしていったきっかけになったと考えられる。ただ、キーワード数が多いために、「徳川家光と江戸幕府」でのTチャート年表と同様、Tチャート内の関連づけについては、関連づけを表す線を引くスペースがなく、Tチャート内にはキーワードを貼るだけになった。

一方、Tチャート間の関連を表すStage 3を4つ配置している。

このことから、A児はTチャート年表上ではTチャート内の関連を表すことはできていないが、毎時間のTチャートの作成や、年表上でのTチャートを出来事の起こった順に並べる操作などを通して、各Tチャートのキーワードを十分吟味し、キーワード間の関連を見いだすことができているのではないかと考える。その上で、Stage 3を配置し、Tチャート間の関連を見いだすことができていると考えられる。

江戸時代の学習内容との関連づけについては、Tチャート年表上においては見られなかった。

イ. 記述内容からの分析

A児は「明治維新が行われたころの世の中」について、以下のようなまとめを行った。

【A児の「明治維新をつくりあげた人々」の単元終了後のまとめ】

私が明治時代の学習で心に残っていることは、3つあります。1つ目は学校制度です。教科書の84ページを見て、これはどうしてだろうと思いました。新政府の改革の1つの学校制度は、今と違い、学校はお金がいらないのに、昔はお金を払わなければなりません。なのでお金を払えない人は学校には行けなかったのです。改革をしてもまだまだ差別されてきた人はそのままの時が続いたのです。このことから、私は差別されてきた人々はどんな気持ちだっただろうと思いました。きっと明治政府には腹をたて、いつ解放されるのかと待ち望んでいると思います。

2つ目は自由民権運動です。教科書の87ページにある自由民権運動が広がるというところを見て、板垣退助は政府のものだけが政治を進めるのではなく、国民の意見を聞くべきだという考えがあるということが分かりました。このことから武力から言論へと変わった世の中にはその考えは国民にはとても認められたらと思う。私も自分の意見を聞き入れてもらうとうれしいし、少しでも国のために役立たいと思います。

3つ目は文明開化です。教科書の86ページの人々の考え方や暮らしが変わるというところを見て、文明開化で人々の服装や食べ物が変わり、現代にあるものなどもあったことが分かりました。このことから、私は西洋風の文化は当時の日本人にはどんな感じだったのかなと思います。きっと私だったら新しいものばかりなのでとても驚いたと思います。それと同時に人々の考え方も変わり、福沢諭吉の考えは広く認められました。

明治時代の学習をして私は、様々なものが変わったのだけれど、差別されてきた人々はそのままでいたりするので、まだそういう古い考えをもった人がいたんだなと思いました。けれど、その変わったものは今につながったのだと思います。

(666字)

A児の記述を見ると、まとめ方例を提示したことにより、3つの点に焦点を当てながら明治時代を見直し、最後に自分の考えをまとめている様子が分かる。明治維新により世の中が変わっている様子を表しながら、それぞれの事象について自分の考えを記述している。

そして、最後の段落では、明治維新での変化した部分と変化していない部分の実態を認識しつつ、今の自分の生活とのつながりを意識した考えのまとめになっている。これはA児がTチャート年表を活用して各歴史的事象のつながりを把握し当時の世の中を概観することにより、時代相を認識した考えや自分の生活とのつながりを意識した考えを記述することができたからではないかと考える。

また、A児の各単元での考えの記述量を比較すると、単元ごとにその量が増加していることが分かる。このことは、学習の積み上げやまとめ方例の提示が要因ではないかと考える。

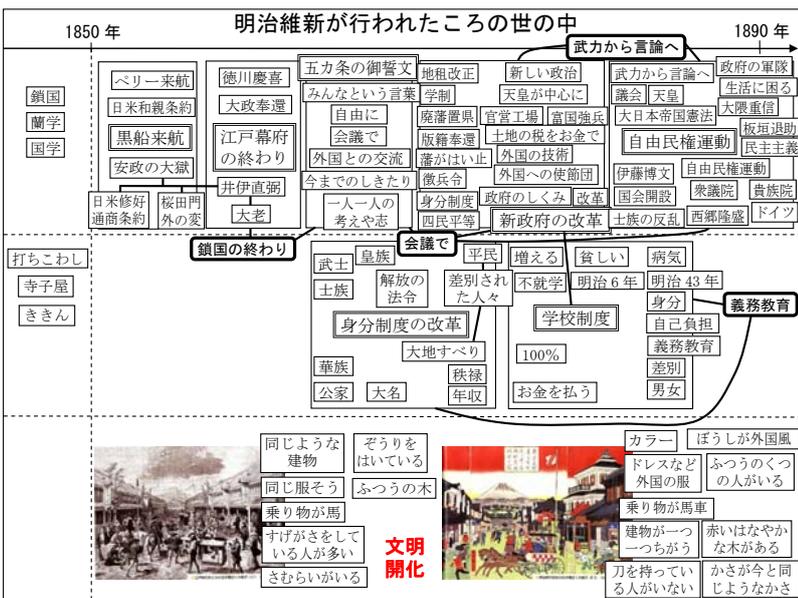


図2-25 A児の「明治維新が行われたころの世の中」についてのTチャート年表

〔B児の変容について〕

ア. Tチャート年表からの分析

図2-26はB児の「明治維新が行われたころの世の中」についてのTチャート年表である。

各Tチャートを見ると、キーワード数が増加していることが分かる。これは、Tチャートの作成手順を理解できたことにより、Tチャートを配置した後に、さらに資料などからキーワードを抜き出す時間が確保できたことが要因と考えられる。

一つ一つのキーワードの内容については、追究活動に必要なキーワードが多く抜き出されていた。その中には、「ふじさんがある」「いぬがあらそっている」など、直接追究活動に必要なと思われるものも見られる。しかし、些細なことかもしれないが、実践授業の様子やTチャート年表を作成する様子から、これらの書き出した内容はB児が資料を読み取る楽しさや視点を知ったことの表れではないかと考える。

関連づけについては、B児もTチャート内での関連づけは見られなかった。しかし、Tチャート間での関連づけやStage 3の配置については、今までの単元と比べて増加した。関連づけた内容については、政治の動きに関するものだけでなく、明治維新による人々の生活の変化を「新しい時代」というStage 3で関連づけるなど、社会の動きと人々の生活とのつながりを見いだしているように思われる。

前の時代とのつながりについては、Tチャート年表上では表されていない。

イ. 記述内容からの分析

B児は「明治維新が行われたころの世の中」について以下のようなまとめを行った。

【B児の「明治維新をつくりあげた人々」の単元終了後のまとめ】

私が明治時代の学習で心に残っていることは3つあります。
 1つ目は、福沢諭吉がいった「天は人の上に人を作らず、人の下に人を作らず」と言ったことです。それは、教科書の86ページにある資料を見て知りました。理由は、今までは、人の下に人はいっぱいいたし、それで苦しんでいた人がいて、私は同じ人間なのに…と思っていたから、私は福沢諭吉さんの言葉がうれしかったです。それを広めてくれた人たちもすごいと思った。
 2つ目は、5か条のご誓文です。それは教科書の83ページの資料から分かりました。5か条の御誓文は今までからしたら考えられないことがいっぱい書かれてあって、もっとも私がびっくりしたことは、「みんなの意見を聞く」や、「みんなの心を合わせて」などと書いてあったことです。次にびっくりしたことは外国とのかかわりをもととしていることです。これがもっと前からあれば苦しむ人は少なかったと思います。
 3つ目は、学校制度です。このとき小学校が作られなかったら、今、私たちは勉強もできていないし、字も書けないから、あの時に小学校ができてよかったと思いました。
 明治時代は、新しい時代だと思いました。でも、明治時代はいろいろなうれしいことが発表されていたが、実行するにはとても時間がかかることがあった。だから少しずつみんな平等になっていくのに長い時間がかかった。そして今、私たちは平等に生きれているんだと思いました。(592字)

B児についても、A児と同様、まとめ方例を示したことにより、3つの点に焦点を当てて明治時代を見直している様子が分かる。特にB児の場合は、3点とも政治の動きに人々の生活を関連づけながら記述している。例えば1点目の福沢諭吉について、江戸時代の学習では人々に対する差別について「同じ人間なのに…」と差別を悲しむ記述が見られたB児であるが、福沢諭吉の言葉を学んだことにより、その考えが深まっている様子が分かる。

このことは、当時の時代相を認識した上での考えであると思われる。他の点についても、当時の時代相を認識した上での考えや今の自分の生活との関わりを意識した考えが見られた。

しかし、最後の段落である明治時代を概観した考えでは、明治維新のよい面だけが書かれていて、差別が残ったことなどの課題についての記述は見られなかった。また、自分との関わりでは、「平等に生きれているんだ」というように、明治時代の改革があったことにより、現代が平等であると考えている記述も見られ、指導の工夫が必要であった。

考えの記述量は、A児と同様、学習の積み上げやまとめ方例の提示により、その量が増加していた。

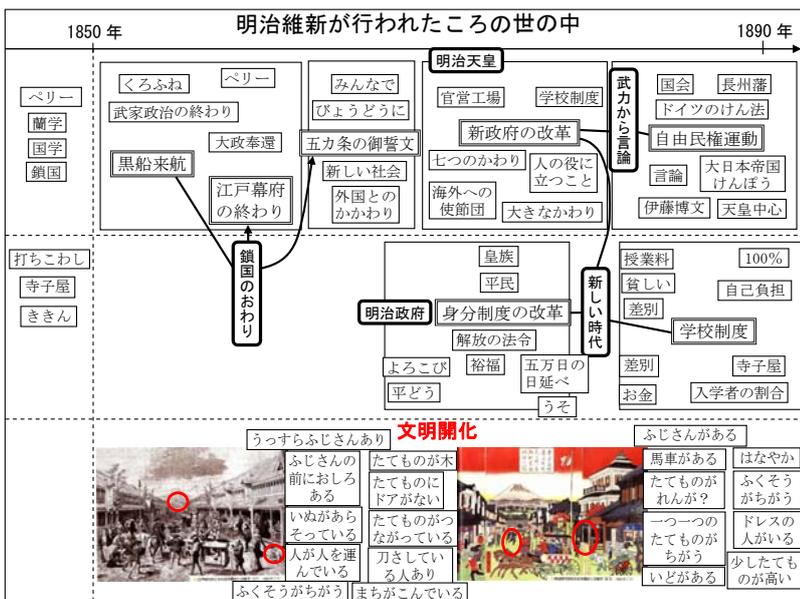


図2-26 B児の「明治維新が行われたころの世の中」についてのTチャート年表

第4節 実践授業を終えて

実践授業を通して、子どもたちの社会科学習に対する意識はどのようになったのだろうか。実践授業終了後、実践授業を行った学級の子どもたち（56名）を対象にしたアンケート調査と、指導者を対象にした聞き取り調査をもとに探った。

図2-27～32はアンケート調査の結果である。アンケート調査は択一式と記述式で実施した。

（1）言語化の活動による子どもたちの変容

○【言語化①ーイメージの明確化】について

図2-27は、「資料から分かることを短い言葉で書き出すことは、資料をくわしく見ることに繋がったと思いますか」に対する回答結果である。

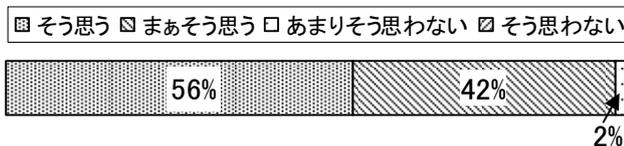


図2-27 アンケート調査「資料から分かることを短い言葉で書き出すことは、資料をくわしく見ることに繋がったと思いますか」の回答結果

これを見ると、98%の子どもたちが「そう思う」「まあそう思う」と肯定的な回答をしたことが分かる。

図2-28は、「資料から分かることを短い言葉で書き出すことは、調べるための材料を多く集めることにつながりましたか」に対する回答結果である。



図2-28 アンケート調査「資料から分かることを短い言葉で書き出すことは、調べるための材料を多く集めることにつながりましたか」の回答結果

これを見ると、94%の子どもたちが「そう思う」「まあそう思う」と肯定的な回答をしたことが分かる。

これらの結果は、資料から分かる情報をイメージ上で操作するより、資料から分かる情報を言葉に書き出して操作する方が、資料の読み取りをより詳細に、確実に行うことができることを、子どもたちが実感したからではないかと思われる。実践授業においても、資料から分かることを書き出すことで、自分自身が読み取った内容を視覚的に把握することができ、書き出した情報が少ない部分

については、さらに読み取ろうとする姿が多く見られた。

また、短い言葉で書き出すことにより、子どもたちが1つの資料からより多くの情報を得ることができたり、様々な資料から情報を集めることができたりしたことも理由の一つと考えられる。

子どもたちが【言語化①ーイメージの明確化】について、記述式で回答した例を以下に示す。

○資料をよく見て、小さいことでも発見できる。
 ○自分でいろいろなことが見つけれられる。
 ○短い言葉で書くので、たくさん見つけられる。
 ○写真に写っているものや人の考えなどが分かりやすくなる。
 ○ノートに整理して書きやすくなった。
 ○詳しいことも分かってくるし、資料を見る力がついてくる。

これらの記述式による回答では、資料からの情報を書き出すことにより、資料を詳細に読み取ることや、多くの情報を見いだすことに役立つ声が聞かれた。また、ノートへの記録についても、情報を短く書き出すことの効果を感じていた。

以上のことから、【言語化①ーイメージの明確化】の活動を取り入れることにより、子どもたちが資料を丹念に、正確に読み取ることや、追究活動に必要な情報を多く集めることに一定の効果があつたと考えられる。

○【言語化②ー事象の関連づけ】について

図2-29は、「Tチャートをつくることで、学習したものの同士のつながりや関係を見つけやすくなったと思いますか」に対する回答結果である。

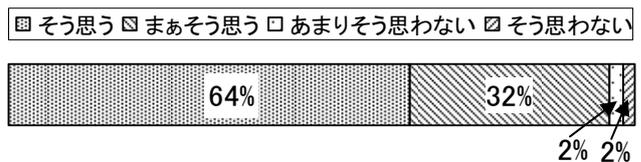


図2-29 アンケート調査「Tチャートをつくることで、学習したものの同士のつながりや関係を見つけやすくなったと思いますか」の回答結果

これを見ると、96%の子どもたちが「そう思う」「まあそう思う」と肯定的な回答をしたことが分かる。

この結果は、学習内容を付箋紙に書き出してTチャート上で操作することにより、複数の事象を比較し意味の近いもの同士を近くに位置づけることができ、つながりを見いだしやすくなったからではないかと考えられる。

次頁図2-30は、「Tチャートを年表にならべることで、出来事の前後の関係など、歴史の流れをつかみやすくなったと思いますか」に対する回答結果である。

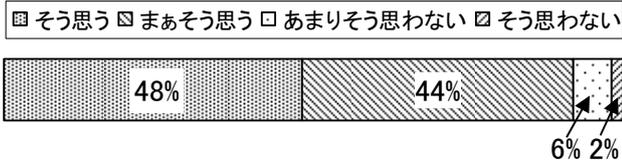


図2-30 アンケート調査「Tチャートを年表にならべることで、出来事の前後の関係など、歴史の流れをつかみやすくなったと思いますか」の回答結果

これを見ると、92%の子どもたちが「そう思う」「まあそう思う」と肯定的な回答をしたことが分かる。

この結果は、Tチャートを作成することにより、各歴史的事象の内容を把握することができる上に、作成したTチャートの内容を踏まえながら出来事の起こった順に並べることにより、従来の年表とは違い、キーワードの意味を確かめながら時間の流れを把握することができたからではないかと考えられる。実践授業では、例えば「文明開化はペリーが来航して鎖国が終わって、外国の文化が入ってきたから起こったんだ」などの声が聞かれた。このような声が聞かれたのは、1時間ごとの学習ではつながっていなかった内容が、Tチャートを年表上に並べて概観することにより、出来事の因果関係や関連を見いだすことができたからではないかと考える。

子どもたちが【言語化②—事象の関連づけ】について、記述式で回答した例を以下に示す。

- 1つの時代でたくさんのつながりを見つけられる。
- Tチャートを越えているんなものをつなげることにより、いろんなことが発見できる。
- 短くまとめた言葉の意味をつなげて考えるので、物事をつながりをつかみやすい。
- Tチャート年表をつくることで歴史の流れがよく分かった。
- 1つ1つのTチャートに名前が付いているから、時代の流れがよく分かる。
- Tチャート年表にすると、歴史に動きが出てくる。
- キーワードをTチャートに分けてはることで、頭の整理がよくできていい。
- Tチャート年表をつくることで、いろんなことを関連づけて見つけることが大切だということが分かるところがいい。

これらの記述式による回答では、Tチャート年表をつくることにより、各歴史的事象相互の関連を把握しやすいという声や、学習内容をTチャートの作成を通して分類・整理できる良さについての声が聞かれた。また、Tチャート年表の作成を通して、歴史的事象を関連づけながら考える態度を育成する面でも一定の効果がみられたと考えられる。

以上のことから、【言語化②—事象の関連づ

け】の活動として取り入れたTチャートは、子どもたちにとって学習内容の整理に役立ち、事象相互のつながりを把握することを促進したと考えられる。また、作成したTチャートを年表上に並べるTチャート年表の活動は、子どもたちにとって歴史的事象の前後関係の把握を促し、歴史の流れをつかむことを促進したと考えられる。

○【言語化③—思考の深化】について

図2-31は、「Tチャート年表を活用することで、考えを文章にまとめやすくなったと思いますか」に対する回答結果である。

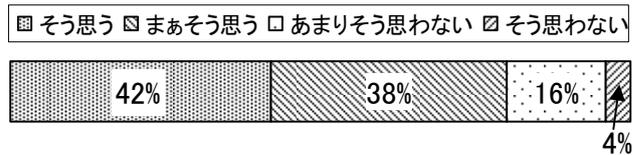


図2-31 アンケート調査「Tチャート年表を活用することで、考えを文章にまとめやすくなったと思いますか」の回答結果

これを見ると、80%の子どもたちが「そう思う」「まあそう思う」と肯定的な回答をしたことが分かる。

この結果は、考えをまとめる際にTチャート年表を作成して学習内容を構造化することにより学習内容が整理され、自分の考えを文章化する際に効果的な支援となったことを表している。

しかし、20%の子どもが「あまりそう思わない」「そう思わない」と否定的な回答を示しており、Tチャート年表が自分の考えを文章化する際に直接活用できなかったことがうかがえる。実践授業では、Tチャート年表の作成と合わせて、考えのまとめ方を提示し、自分の考えを文章化する際の手だてとした。しかし、作成したTチャート年表を活用せず、教科書やノートとまとめ方を活用しながら、考えを構成する子どもも見られた。考えを構成する際に、Tチャート年表が有効に活用される方法をさらに検討する必要性を感じた。

図2-32は、「Tチャート年表を活用することで、明治時代について深く考えることができたと思いますか」に対する回答結果である。

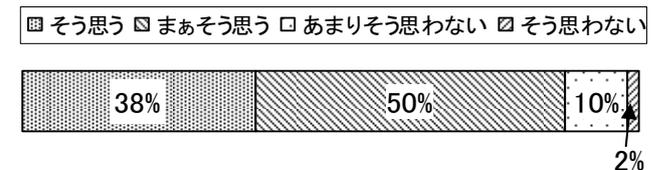


図2-32 アンケート調査「Tチャート年表を活用することで、明治時代について深く考えることができたと思いますか」の回答結果

これを見ると、80%の子どもたちが「そう思う」

「まあそう思う」と肯定的な回答をしたことが分かる。

しかし、12%の子どもが「あまりそう思わない」「そう思わない」と否定的な回答をしており、Tチャート年表が考えを深めるための手だてとしては十分でなかったと考えられる。実践授業では、Tチャート年表を活用した交流活動や、交流活動後に考えを再構成する活動を行った。しかし、交流したことを自分の考えに反映できなかった子どもも見られ、Tチャートを活用しながら考えを深めるための手だてについて、さらに検討する必要性を感じた。

子どもたちが【言語化③－思考の深化】について記述式で回答した例を以下に示す。

- 今までの学習と違って、1つ上のレベルで深く追究できるところがいい。
- Tチャート年表をつくって自分の意見・考えなどをもって発表することができ、より深まっていくところがいい。
- 何と何を線でむすぶのかを考えることを通して、より深くそのことを考えることができる。
- Tチャート年表をつくった後で、もっと深く考え、理解しようとしたのがよかった。

これらの結果から、【言語化③－思考の深化】の活動として取り入れたTチャート年表は、見いだした歴史的な事象相互の関連から、子どもたちが各時代について考えを深めることを促進することについて役立つものとなった。また、事象間のつながりについて深く考えることを通して、深く理解しようとしたり考えようとしたりする態度を養うための効果的な支援となった。

(2) 指導者から見た言語化の活動

実践授業を行った指導者は、言語化の活動を実践して、どのように感じたのであろうか。子どもたちの変容や授業を行った感想などについて、聞き取り調査を行った。

【言語化①－イメージの明確化】については、「先行知識がある子どももいない子どもも、同じ活動からスタートできるので、全員が授業に参加できていた」「活動に慣れてくると資料の読み取りがスムーズになった」「一人一人の資料に対する見方が変わってきた」などの声が聞かれた。

【言語化②－事象の関連づけ】については、「Tチャートを作成する過程で、事象間のつながりを意識できる」「Tチャート年表を作成したことにより、一つ一つの出来事がつながっていることや、政治と人々の生活がつながっていることを実感する子どもが多く見られた」などの声が聞かれ

た。また、各時間のキーワードを使ったまとめの活動について「知識・理解面も定着できる」「他教科でも応用できる」という声が聞かれた。

【言語化③－思考の深化】については、「『源頼朝と鎌倉幕府』の実践では、分かったことをまとめるだけであったが、考えのまとめ方例の提示やつながりの把握を実感することで、『考えをまとめる』『考えを深める』ことにつながった」「政治と人々の生活をつなげながら考えるようになった」など、子どもたちの変容に関する声が聞かれた。また、Tチャート年表を使った交流活動については、「友だちの意見を聞くことで理解が深まる」「友だちの発表を聞くことで、様々な考え方に気づいたり、同じ考えが出て安心したりすることができた」という声が聞かれた。

その他にも、次のような声が聞かれた。

- 子ども自身も自分の学習の程度が高まっていくことを実感していた。
- 発表が苦手な子どもがどの程度学習内容を理解しているのか、言語化することでよく分かる。
- 言語化の活動やTチャート年表の作成により、つまづきをつかみやすく、間違っているところへの支援がしやすい。

これらの声は、言語化の活動により指導者自身が子どもたち一人一人の学習の程度を把握することで、適切な支援を行うことができることを表している。また、指導している中で、子どもたちが自分の学習スキルの高まりを実感している様子を感じられたと、指導者は話していた。

言語化の活動を通して、最も子どもたちが変容した点として指導者が挙げたのは「文を書くことへの抵抗がなくなり、社会科だけでなく他の教科でも自信をもって文章化することができるようになった」という点である。言語化の活動が、考えの文章化を促進したことの表れであると考えられる。

このように、実践授業を通して、指導者自身が子どもたちの日々変容していく姿を実感していたとの声が多く聞かれた。しかし、これらの実践を通して、Tチャート年表をより効率よく作成する方法や、交流活動を通して自分の考えを深めるための手だての在り方、評価の在り方などが課題として明らかになった。

(26) 京都市教育委員会『京都市立小学校教育課程 指導計画 社会科』2005.4 6-社-13

(27) 京都市教育委員会 小中人権教育指導プロジェクト『人権教育指導資料集(参考試案)』2006.4 同-5

(28) 前掲(26) 6-社-18

(29) 前掲(26) 6-社-23

第3章 自らの考えを深める子どもを育成するために

本章では、実践授業から明らかになった本研究の成果・課題を整理し、子どもたち一人一人の思考の深化を促すために必要なことは何かについて、述べることにする。

第1節 言語化の活動が歴史学習にもたらす効果

本節では、言語化の3つのステップを取り入れた学習活動とTチャート年表の作成を通じた活動が歴史学習に及ぼした効果について、子ども、指導者の姿から考察する。

(1) 言語化の3つのステップが果たした役割

ア.【言語化①ーイメージの明確化】

歴史学習において、資料から分かる情報を書き出す活動では、次の4点で成果が見られた。

1 点目は、資料の読み取りを詳細に、確実に行う姿が見られた点である。資料にはその時代の特色を示す情報が多く含まれている。実践授業では資料を印刷して学習プリントを作成し、資料から分かる情報を書き出す活動を行った。情報を書き出すことにより、子どもたちは自分が読み取った量の程度を把握し、さらにつかめる情報がないか資料を隅々まで見て情報を書き出していた。

2 点目は、子どもたちが多様な資料の見方・考え方に気づくことができた点である。小グループや学級全体で書き出した情報を交流することにより、自分が気づいていなかった情報を知ったり、同じ情報を読み取っても解釈が違うことに気づいたりするなど、資料を読み取る際の多様な見方に気づくことができた。そして、意見交流を行う中で、重要なキーワードが浮き出て、さらなる追究活動へとつなげることができたと考えられる。

3 点目は、子どもたち一人一人の先行知識の有無や程度に関係なく、指導者が学習を進めることができた点である。実践授業「源頼朝と鎌倉幕府」の「調べる」場面において、家庭学習での調べ学習が多い子どもが交流活動の中心になりがちであった。学習プリントに資料から分かる情報を書き出す活動を取り入れることにより、同じ資料の読み取りから学習をスタートでき、読み取り内容から個々の追究活動につなげることができた。

4 点目は、指導者が子どもたちの資料を読み取った量や学習内容の理解の程度を把握し、適切

な指導・助言を行うことができた点である。資料をイメージ上で操作するだけであったり、学級全体で資料からの気づきを交流したりするだけでは、一人一人の資料の読み取り内容を把握することや資料を読み取る力を育成することは難しい。一人一人が資料を丹念に読み取って書き出した情報を見ることにより、一人一人に適切な支援を行うことができたと考えられる。

以上のことから、【言語化①ーイメージの明確化】の活動は、歴史学習において資料から多くの情報を取り出すことや、資料に対する多様な見方・考え方を育成することに効果があったと考えられる。

イ.【言語化②ー事象の関連づけ】

資料から読み取った情報などの学習内容を関連づける活動では、次の3点で効果が見られた。

1 点目は、【言語化①ーイメージの明確化】の活動を通して毎時間書き出したキーワードを使って、1時間のまとめをすることで、学習内容の定着を促すことができた点である。選び出したキーワードを活用しながら1時間の学習のまとめをノート2~3行に文章化することにより、文章のつながりから選び出したキーワードの適切さを文章のつながりから確認することや、複数の事象を関連づけて理解することができたと考える。また、この活動を通して、学習内容を関連づけながら考える態度を養うことができたと考えられる。

2 点目は、Tチャートの作成を通して、子どもたちが自ら事象の関連を見いだすことができた点である。【言語化①ーイメージの明確化】の活動を通してキーワードを付箋紙に書き出し、関連のある事象同士でまとまりをつくりながらTチャート上に配置することにより、事象相互のつながりが見いだしやすくなったと考えられる。

3 点目は、Tチャートを年表上に配置するTチャート年表の作成を通して、歴史的な事象が起こった時間の前後の関係を把握するなど、子どもたちが歴史の大きな流れを把握することができた点である。各時間の学習内容をTチャートで表し、年表形式で配置をすることで、各事象の共通点を見いだすことだけでなく、各事象相互の因果関係や出来事の起こった時間の前後関係をつかむことができた。

以上のことから、【言語化②ー事象の関連づけ】の活動は、個別の事実・事象のつながりを見いだすことを促したり、関連を見いだそうとする態度を養ったりする上で効果があったと考えられる。

ウ.【言語化③－思考の深化】

関連づけられた知識から自らの思考を深める活動では、次の3点で効果が見られた。

1点目は、Tチャート年表を活用することにより、**事実**に即して筋道立てた考えを構成する姿が見られた点である。Tチャート年表上に表されているキーワードは、資料から見いだした事実・事象である。それらのキーワードを活用しながら考えを構成することは、**事実**に即して筋道立てた考えを構成することにつながる。また、事象間の関連に意味づけをするStage 3を配置することで、事象間の関連をより明確に表すことができ、筋道立てた考えの構成を促進することができた。

2点目は、**自分の考えを文章化する際、考えのまとめ方例を提示することにより、思考の深化を促すことができた点**である。考えのまとめ方例は、心に残った3点から学習内容を見つめ直した後、単元を概観しながら自分の考えを表すように構成されている。Tチャート年表を見ながら心に残った3点を選び出し、Tチャート上のキーワードを活用しながら考えを構成することで、筋道立てた考えを文章に表すことができた。また、自分の考えを文章化することが苦手な子どもにとっては、学習した内容をTチャートと考えのまとめ方例を活用することにより、文章化することへの抵抗を感じずに、自分の考えを構成することができた。

3点目は、Tチャート年表を活用した**交流活動を行うことにより、思考の深化を促進することができた点**である。交流活動においてTチャート年表を提示することで、発表者の考えの根拠をつかみながら発表内容を聞くことができる。自分以外の人の考えを的確につかむことで、自分の考えを見直し、深めることができた。また、自分の考えを構成する際、ノートに1行ずつ空けながら考えを記入したことは、交流活動後に自分の考えを加筆・修正しやすくなり、容易に自分の考えを再構成することができたと考える。

以上のことから【言語化③－思考の深化】の活動は、Tチャート年表や考えのまとめ方例の提示、交流活動を取り入れることで、子どもたちの考えを深め、再構成する上で効果があったと考える。

(2) Thinking Chart が果たした役割

Tチャート年表は、言語化の3つのステップに関わって、次の3点の働きをもつものになっていたと考える。

1点目は、**子ども自らが個別の事実・事象の関**

連づけを促進する働きである。複数の学習内容のうち、意味の近いもの同士を近くに配置しながらTチャートを作成することにより、各時代のキーワードになりうる歴史的事象の因果関係や背景を一目で把握することができた。そして、作成したTチャートを年表上に配置することにより、出来事の前後関係をつかみ、歴史の大きな流れを把握することができた。

2点目は、**子ども自らが個別の思考を構成・深化できるようにする働き**である。Tチャートを構成しているキーワードを使って文章化することにより、**事実**に即して筋道立てた考えを構成することができた。また、Tチャート同士のつながりについて、関連を表すキーワードを配置することにより、複数のキーワードを関連づけながら、各事象の意味を深く追究し、考えを構成することができた。そして、既習の学習内容についても同一Tチャート年表上に配置することにより、既習内容とのつながりを考え、結果として前後の時代相を認識した思考の深化を促すことができた。

3点目は、**発表・交流活動における資料として役立つ働き**である。作成したTチャート年表を提示しながら考えを発表することで、発表者は自分の考えの根拠を示しながら、自分の考えを伝えることができた。また、他の人が発表している時は、その人の考えの根拠をTチャート年表で確認しながら聞くことができるので、発表者の考えをつかみやすく、自分の考えの再構成の際に生かすことができた。

このように、Tチャート年表を作成する活動は、言語化の3つのステップの中でも、特に【言語化②－事象の関連づけ】【言語化③－思考の深化】を促進する役割を果たしていたと考える。

また、言語化の3つのステップには含まれないが、「学習の振り返りができる」「楽しく活動することができる」という子どもたちの声が聞かれた。前者については、学習内容をTチャート年表に表し、全体を概観することにより、各事象のつながりをつかむことができ、その結果、学習内容の理解を深めることにつながったと考える。また、後者については、子ども一人一人が自分のオリジナルの年表を作成していくことが、子どもたちの追究意欲を高めると同時に、Tチャートの操作を通して楽しく活動できるものになったといえる。このことは、Tチャート年表を作成する活動が、社会科学学習への関心・意欲を高めることにつながるものであると考える。

第2節 一人一人の思考の深化を促すために

第1節で述べたように、本研究で取り入れた言語化の3つのステップやTチャート年表を作成する活動は、様々な学習効果を生み出すことができた。ただ、さらに深い思考を行うためには、改善すべき点が見えてきた。それらの点を踏まえながら、一人一人の思考の深化を促すために必要なことは何か、具体例を示しながら考察する。

(1) 歴史学習においてより深い思考を行うために必要なこと

前述の通り、言語化の3つのステップとTチャート年表の活動は、子どもが歴史に対して自ら考えを深めることに効果的な支援であったと考えている。しかし、第1章第2節で述べた思考の深化の姿まで到達できていなかった子どもも見られた。また、到達できていた子どもにとっても、より深い思考を行うためにはさらなる手だてが必要である。子ども一人一人がさらに深い思考を行うためには、何が必要であろうか。実践授業をもとに、次の2点について考察した。

1点目は、Tチャート年表を活用した思考の深め方である。Tチャート年表の作成を通して、子どもたちは学習内容を関連づけ、単元全体を概観することや、1つの時代について多面的に見つめることができるようになった。実践授業では、Tチャート年表に加えて、考えのまとめ方を提示することにより、多くの子どもたちが事実即して筋道立てた考えを構成することができた。

しかし、思考を深めるための事象間のつながりを十分に獲得することができずに、思考の深化の姿に至らなかった子どもも見られた。以下にその記述例を示す。

僕が明治時代の学習で心に残っていることは、2つあります。
1つ目はペリーの来航、教科書の82ページです。江戸時代も終わるころ4せきの黒船が来て、ペリーは開国を求めるということが分かりました。思ったことは、ペリーが開国すると文化がよくなるかと言って開国したと思いました。
2つ目は文明開化、教科書86ページです。分かったことは、西洋のものなどを一番早く西洋の文化を取り入れて日本をよくしようということが分かった。思ったことは江戸時代と比べてみれば、文明が発達して政治がよくなったと思う。

記述例を示した子どもは、実践授業で資料の読み取りはある程度行うことができていた。情報を書き出す量についても、クラス内で見ると平均程度であった。しかし、Tチャート年表にまとめる際、つながりを見いだすことができず、一つの資料から思ったことを書くことでとどまっていた。

つながりを見いだすことができなければ、考えを深めることは困難である。その結果、学習した時代の全体を概観するような思考についても十分に行えなくなる。Tチャート年表を活用した事象間のつながりの見出しについては、発問・板書、学習プリントの工夫など、指導者の支援はもちろん、つながりを見いだす際の交流活動の設定なども必要だと考える。

2点目は、Tチャート年表を活用して行う交流活動の生かし方についてである。実践授業では交流活動を行うことにより、他の人の考えを取り入れながら考えを再構成し、さらなる思考の深化を促す姿が多くの子どもの見られた。Tチャート年表を提示しながら交流することにより、聞き手はその人の考えの根拠や話している内容を視覚的に追いながら発表を聞くことができるので、単に聞くだけよりも伝わりやすいと考える。

しかし、聞いたことを簡潔に記録する方法については課題が残った。交流活動を思考の深化に生かすために、「筋道立てた考えの構成」「分かりやすく表現するための手段」「聞いたことを簡潔に記録する方法」が必要である。

例えば、図3-1は他の人の発表を聞いて記録したノート例である。発表者が話す順にしたがって、①②③と番号をうち、それぞれの発表内容を簡潔にメモし、最後の星印は単元全体についての発表者の考えを表すようにしている。

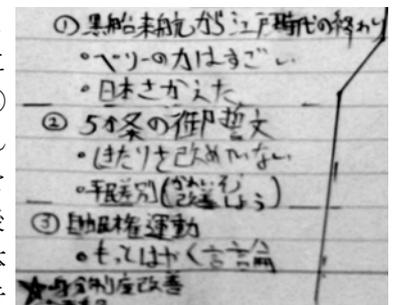


図3-1 他の人の発表を聞いて記録したノート例

しかし、発表内容を短くしただけで、後で振り返ったときに理解できなかった子どもや、大事な内容を精査できずに、数行に渡って長々とメモをしている子どもも見られた。その結果、考えを再構成する際に、他の人の考えを生かすことができなかった子どもも見られた。自分の考えに加筆・修正をしながら考えを再構成することで、さらなる思考の深化を促すことができるにもかかわらず、記録方法が効率的でなかったために、加筆・修正を行うことができなかった。交流活動の際、どのように他の人の考えを記録し、自分の考えを再構成する際に生かすようにするのか、ノートへの記録方法や学習プリントの工夫など、改善する必要性を感じた。

(2) 思考を深めるための関心・意欲

本研究では、時代考証がなされた復元図や当時の様子が分かる写真資料や絵図などから「出会う」場面を設定し、歴史的事象に対する関心・意欲を高めようとして取り組んだ。これらの資料との出会いは、子どもたちの追究意欲を高めることに一定の効果が見られた。しかし、その後の追究活動については、文書資料や統計資料などを目的に応じて活用する必要がある。指導者から提示するだけでなく、自ら資料を収集し、読み取る力を育成することが必要である。その際、他の資料を確実に読み取り、先行知識を蓄えておくことや既習内容を確実に定着させておくことが、深い読み取りを促す手だてになる。例えば、本市が採択している教科書では、「学び方コーナー」という学び方を習得するための記述が掲載されている。このような記述を利用しながら、各種資料を効果的に活用できる力を育成することが大切である。

また、教材と子どもの距離をより近づけるための教材開発も必要である。本研究では主に教科書に掲載されている資料を用いて実践授業を行ったが、地域に関連のある教材や話題になっている時事的なトピックを用いることで、子どもたちはより身近な学習問題の設定を行うことができ、さらなる追究意欲を引き出すことができるのではないかと考える。ただ、局所的な事象から、学習する時代の全体像に広げるための手だては欠かせない。そこで、そのような学習展開を考える際、指導者自身でTチャートを作成することにより、単元の目標に迫るために何が必要か明確につかむことができる。筆者自身も研究協力員と事前にTチャートをつくったことが、学習展開を考えることや必要となる手だてなど、指導計画の作成に役立った。子どもたちの学習だけでなく、Tチャートは教材研究にも生かすことができると考える。

そして、実践授業を通して見られた子どもたちの姿から感じたことは、複数の学習内容がつながって意味が分かったり、自分の生活とつながった時に「分かった」という実感をもつことができ、それが「楽しい」学習につながるということである。Tチャート年表の作成を取り入れた活動は、子どもたちにとって学習内容を「つなげ」、学習内容の意味が「分かり」、「楽しい」学習をすることにつながったと思われる。

(3) Thinking Chartの可能性

Tチャートは、個別の事実・事象の関連づけを

促進する役割や考えの構成・深化を促す役割、交流・発表活動においての資料の役割を果たしていた。これらの学習活動は、社会科に限らず、他の教科でも行うことである。Tチャートの手法は、他教科でも活用できるのではないかと考える。

例えば、国語科の説明文の読み取りでは、段落ごとにキーワードを見だし、それらをTチャートに表すことにより、段落相互の関係を見いだしたり、文章全体の内容を概観したりする学習展開が考えられる。理科では、観察や実験結果をキーワードにして書き出し、Tチャートに表すことにより、事物・現象の性質や規則性を見だし、科学的な見方・考え方を養うような学習展開が考えられる。道徳では、資料中の登場人物の心の動きと自分の考えとを対比させながら、道徳的実践力の育成を図る学習展開が考えられる。このように、活用方法を工夫すれば、Tチャートは社会科学学習に限らず、学校のあらゆる学習場面で取り入れることができると考える。

また、Tチャートは資料からの情報を書き出したり、情報が書かれた付箋紙を操作したりする活動を伴う。このような活動を通して、学習内容を視覚的に表しながら全体像を把握できるようにすることは、学力に課題のある子どもやLD等支援の必要な子どもにとって、効果的な指導方法の一つになるのではないかと考える。

Tチャートは、思考の発達における言語の果たす役割に着目した学習活動の一手法である。子どもたちの思考の発達を促すためには、あらゆる学習活動で言語化の活動を意識することが大切である。そのことは、子どもたち一人一人の学力を保障することにつながると考える。

おわりに

歴史学習は、歴史に対する知識の獲得だけが目的ではない。それらの知識を活用して先人の努力や工夫についての考えを深めることで、現在の自分たちの生活や国家・社会の基盤が築かれた背景を知ることができる。その上で、子ども自身が学習したことを現在及び将来の発展に生かすような主体的に行動する態度の育成や、より良く問題を解決する資質や能力の育成につながると考える。

最後に、本研究は京都市立紫竹小学校の研究協力員の先生方をはじめ、教職員の皆様、歴史を深く見つめ続けていた6年生の子どもたちに支えられ、進めることができた。この場を借りて感謝の意を表したい。

【資料①】言語化の活動を取り入れた「源頼朝と鎌倉幕府」指導計画

□…言語化①－イメージの明確化、□…言語化②－事象の関連づけ、□…言語化③－思考の深化

過程	学習活動	言語化に焦点を当てた留意点	評価の観点・視点
出会う	① 「武士のやかた（復元図）」を参考にして、武士の生活について話し合う。	<ul style="list-style-type: none"> 武士の生活の特徴を明確につかむことができるようにする。〔教科書p. 40～41「武士のやかた（復元図）」〕 時代の変化をとらえやすくする。〔教科書p. 34「都の貴族の屋敷の様子」〕 	<p>【関心・意欲・態度】</p> <p>武士の館と貴族の屋敷の挿絵を比較して、武士の生活と貴族の生活との違いを意欲的に見つけて発表している。</p>
	つかむ 理由を調べる。	<p>武士が登場した時代背景をつかむことができるようにする。〔教科書p. 36～37「貴族を守る武士」〕</p>	<p>【技能・表現】</p> <p>資料を活用して、武士が世の中に登場してきた時代背景について調べている。</p>
調べる	② 武士の中でも強い力をもった源氏と平氏の戦いについて調べる。	<p>平氏が西国に追いつめられていく様子が分かるようにする。〔教科書p. 39「源氏の軍の進路」〕</p>	<p>【関心・意欲・態度】</p> <p>源平合戦の中で、自分が興味をもった戦いの様子を意欲的に調べている。</p> <p>【思考・判断】</p> <p>調べた内容や交流したことをもとに、源平の合戦後、鎌倉幕府を開いた経過を自分なりにまとめ、表現している。</p>
		<p>調べた内容を活用しながら学習を振り返ることにより、源平の戦いの後、源頼朝が鎌倉幕府を開いたことをつかむことができるようにする。</p>	
調べる	③ 鎌倉幕府の様子や仕組みを調べまとめる。	<ul style="list-style-type: none"> 鎌倉に幕府を設置した理由を考えることができるようにする。〔教科書p. 42「鎌倉（復元模型）」〕 ご恩と奉公の関係を理解できるようにする。〔教科書p. 42「ご恩と奉公」〕 	<p>【思考・判断】</p> <p>鎌倉の地形から、攻めにくい地形であることに気づいている。</p> <p>【知識・理解】</p> <p>武士が貴族に代わって政治を始めたことや、その政治の仕組みについて理解している。</p> <p>【思考・判断】</p> <p>調べた内容や交流したことをもとに、鎌倉幕府の様子や政治の仕組みについて、自分なりにまとめ、表現している。</p>
		<p>調べた内容を活用しながら学習を振り返ることにより、鎌倉幕府の様子や政治の仕組み（ご恩と奉公など）について、つかむことができるようにする。</p>	
つかむ	④ 元軍との戦いの様子や戦いの影響についてまとめる。	<p>当時の武士たちが必死になって戦ったことをつかむことができるようにする。〔教科書p. 44「元との戦い」、p. 45「守りに向かう武士」〕</p>	<p>【技能・表現】</p> <p>元との戦いの絵から、元の兵士と日本の武士の戦い方の違いについて調べている。</p> <p>【思考・判断】</p> <p>元との戦いのあと、ご恩と奉公の関係が崩れていったことに気づいている。</p>
		<p>調べた内容を活用しながら学習を振り返ることにより、元寇がきっかけとなって幕府と武士の関係を結んでいたご恩と奉公が崩れ、鎌倉幕府が倒れたことをつかむことができるようにする。</p>	
調べる	⑤ 今に生きる室町の文化について調べる。	<p>室町時代に生まれた文化の特徴をつかむことができるようにする。〔教科書p. 46「金閣と足利義満」、銀閣と足利義政〕</p>	<p>【技能・表現】</p> <p>室町の新しい文化について調べまとめている。</p> <p>【知識・理解】</p> <p>武士や民衆の中から新しい文化が生まれ、広まっていったことを理解している。</p>
調べる	⑦ 庭園づくりにかかわった人々について調べ、庭園づくりにかかわった人々の思いについて考える。	<p>庭園づくりにたずさわった人が「差別されていた人々」であることに気づき、高い技術を完成させた誇りと差別される矛盾に対する思いに着目できるようにする。〔「又四郎の言葉」〕</p>	<p>【思考・判断】</p> <p>庭園づくりにかかわった人々の思いを考えることにより、芸能や芸術を完成させた誇りと、身分の上で差別されていた矛盾に対する思いを考え、適切に判断している。</p>
まとめる	⑧ Tチャート年表を作成し、武士が政治を始めたころの世の中についてまとめる。	<p>作成したTチャート年表でつながりを確認することにより、武士が政治を始めたころの世の中についてまとめることができるようにする。</p>	<p>【思考・判断】</p> <p>Tチャート年表をもとに、武士が政治を始めたころの世の中について、自分の考えを筋道立て、まとめる。</p>

【資料②】言語化の活動を取り入れた「徳川家光と江戸幕府」指導計画

…言語化①—イメージの明確化, …言語化②—事象の関連づけ, …言語化③—思考の深化

過程	学習活動	言語化に焦点を当てた留意点	評価の観点・視点・方法
出会う	① 大名行列について調べる。	参勤交代の特徴を明確につかむことができるようにする。〔教科書p. 60～61「金沢藩(加賀藩)の参勤交代図」〕	【関心・意欲・態度】 参勤交代図を通して、江戸幕府の政治や社会に関心をもっている。
つかむ	徳川家光について知る。	家光の力の大きさを明確につかむことができるようにする。〔教科書p. 63「将軍と大名」「生まれながらの将軍とは？」〕	【思考・判断】 江戸幕府が力を強めていった手段について調べる学習問題をつかんでいる。
調べる	② 江戸幕府はどのようにして大名を従えていったのか調べる。	江戸幕府は大名に経済的負担を負わせるとともに、厳しい決まりで支配したことに気づくことができるようにする。〔教科書p. 62「おもな大名の配置」「金沢藩の支出」〕 調べた内容からキーワードを選び出し、それらを活用しながら学習をまとめることにより、徳川家光が行った政策について理解できるようにする。	【知識・理解】 参勤交代の制度は、経済負担を大きくして諸藩が大きな力を持つことを防ごうとした家光の意図であることを理解している。
	③ 徳川家光は、百姓や町人などをどのようにして支配したのか調べる。	・江戸時代の人口における百姓の占める割合の大きさに気づくことができるようにする。〔教科書p. 64「江戸時代の身分ごとの人口の割合(江戸時代の終わりごろの割合)」〕 ・幕府が百姓や町人の生活を厳しく規制したことに気づくことができるようにする。〔教科書p. 65「百姓が負担するいろいろな税や役」「百姓の生活の心得」〕 調べた内容からキーワードを選び出し、それらを活用しながら学習をまとめることにより、この時代の社会体制が人を大切にするのとかけ離れたものであることを、自分の考えとしてもてるようにする。	【思考・判断】 幕府が百姓や町人の生活を規制したことを進んで調べ、考えながら追究している。
	④	・差別されてきた人々の生活の厳しさをつかむことができるようにする。〔「百姓や町人とは別にきびしく差別されてきた人々に対するきまり」、教科書p. 65「差別されてきた人々」〕 ・差別されてきた人々が当時の社会を支えていたことや、伝統的な文化を伝えてきたことをつかむことができるようにする。〔教科書p. 65「差別されてきた人々」〕 調べた内容からキーワードを選び出し、それらを活用しながら学習をまとめることにより、差別されてきた人々が、厳しい条件の中でも社会や文化を支えていったことを理解できるようにする。	【技能・表現】 差別されてきた人々の生活を調べている。 【思考・判断】 差別されてきた人々の思いについて考え、適切に判断している。
	⑤ 江戸幕府と外国とのかわりについて調べる。	・キリスト教を禁止した幕府の意図を追究したいという意欲をもつことができるようにする。〔教科書p. 67「正月の絵踏みとそれに使われた像」〕 ・鎖国によって貿易が制限された中、朝鮮とは国交があったこと、朝鮮通信使が当時の庶民の歓迎を受けただけでなく、文化の発展にも寄与したことに気づくことができるようにする。〔教科書p. 68「朝鮮通信使の行列」「地域に見る朝鮮通信使」〕	【知識・理解】 キリスト教の禁止や海外との貿易の統制などが行われ、江戸幕府の政治体制が安定してきたことを理解している。
まとめる	⑥ ⑦ Tチャート年表を作成し、江戸幕府が開かれたころの世の中について自分の考えをまとめる。	作成したTチャート年表でつながりを確認することにより、江戸幕府が支配を強めていった様子について、自分の考えを筋道立ててまとめることができるようにする。	【思考・判断】 Tチャート年表をもとに、江戸幕府が支配を強めていった様子について、自分の考えを筋道立ててまとめる。

【資料③】言語化の活動を取り入れた「明治維新をつくりあげた人々」指導計画

□□□…言語化①－イメージの明確化, □□□…言語化②－事象の関連づけ, □□□…言語化③－思考の深化

過程	学習活動	言語化に焦点を当てた留意点	評価の観点・視点・方法
出会う	① 文明開化による人々のくらしの変化を調べる。	明治初期の文明開化により、人々の生活が西洋化したことに気づくことができるようにする。〔教科書p. 80「江戸時代末ごろの日本橋近くの様子(江戸, 1860年ごろ)」p. 81「明治時代初めの日本橋近くの様子(東京, 1880年ごろ)」p. 86「明治のこゝろ始め年表」など〕	【関心・意欲・態度】 幕末と明治初期の日本橋の比較から、生活上の大きな変化に関心をもっている。 【技能・表現】 文明開化により人々の生活が西洋化したことを調べ、自分の生活とのかかわりを考えながら分かりやすく表現している。
つかむ	② ペリーの来航と開国が与えた影響について考え、討幕運動の結果、明治政府が誕生したことを調べる。	・黒船が来航した当時の様子や人々の思いについて気づくことができるようにする。〔教科書p. 82「ペリーの上陸」〕 ・長く続いた鎖国が終わったことや、260年続いた江戸幕府が終わったことを理解できるようにする。また、そこには大久保、西郷、木戸など若い武士の活躍があったことに気づくことができるようにする。〔教科書p. 83「徳川慶喜は、政権を朝廷に返すことを決めました」など〕	【知識・理解】 ペリーの来航、明治政府が誕生するまでの流れを理解している。 【思考・判断】 明治維新によって短期間に急激な変化があったことにかかわる学習問題をつかんでいる。
調べる	③ 明治政府がめざした国づくりについて考える。	明治政府の諸政策について理解できるようにする。〔教科書p. 83「5か条の御誓文」、p. 84「官宮富岡製糸場」など〕 調べた内容からキーワードを選び出し、それらを活用しながら学習をまとめることにより、明治政府の国づくりについて考えをまとめることができるようにする。	【知識・理解】 参勤交代の制度は、経済負担を大きくして諸藩が大きな力を持つことを防ごうとした家光の意図であることを理解している。
	④ 江戸時代の身分制度が改められたことについて調べる。	差別されてきた人々の生活の厳しき、差別されてきた人々が当時の社会を支えていたことや、伝統的な文化を伝えてきたことをつかむことができるようにする。〔「差別されてきた人々に対するきまり」、教科書p. 65「差別されてきた人々」〕 調べた内容からキーワードを選び出し、それらを活用しながら学習をまとめることにより、差別されてきた人々が厳しい条件の中でも社会や文化を支えていったことを理解できるようにする。	【知識・理解】 江戸時代の身分制度が明治政府の改革によって改められたことを理解している。 【思考・判断】 身分上は平等になっても日常生活では差別が残された事実から、人々の思いを考え、適切に判断している。
	⑤ 学校制度により、すべての子どもたちが教育を受けることができたのか調べる。	学校制度は、すべての子どもが教育を受けることを目的に出されたが、実態としてすべての子どもたちが教育を受けることができなかったことをつかむことができるようにする。〔「学事奨励に関する被仰出書」「ある県の差別されていた人々の就学率」、教科書p. 84「小学校入学者の割合の変化」〕 既習内容と調べた内容を関連づけることにより、学校制度はできたが様々な原因で就学率に格差があり、教育の機会均等が保障されなかったことを考えることができるようにする。	【知識・理解】 学校制度ができたが就学率に格差があり、教育の機会均等が実際には何も保障されていなかったことを理解している。
	⑥ 自由民権運動の広がりや国会開設の様子について調べる。	・明治政府の改革に対する国民の反対の声が自由民権運動として広がったことに気づくことができるようにする。〔教科書p. 87など〕 ・大日本帝国憲法は天皇が国を治める形がとられたことや、国会は一部のみにしか参政权がなかったことを理解できるようにする。〔教科書p. 88「憲法の発布」「憲法のおもな内容」など〕	【思考・判断】 自由民権運動の広がりについて、その背景を考えながらまとめている。 【技能・表現】 国会が開設されるまでのできごとを調べ、発表している。
まとめる	⑦ Tチャート年表を作成し、明治初期の世の中について自分の考えをまとめる。 ⑧	作成したTチャート年表でつながりを確認することにより、明治維新が行われたころの世の中について、自分の考えを筋道立ててまとめることができるようにする。	【思考・判断】 Tチャート年表をもとに、明治維新が行われたころの世の中について、自分の考えを筋道立ててまとめる。